

393

535

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18

始



沖の鷗に事問へば 海洋史話



393-585



話 史 洋 海

ば へ 問 事 に 鷗 の 沖



大正  
12.7.20  
内交

序

氣が腐るときは海の物語でも讀むことである。例へば都會の陋巷の屋根裏にも一脉洋々の生氣が流れこんで来る。

文明は人類の自然征服史である。初め、人は海に親しむことを知らず、たゞ矢鱈に怖れた。今だつて怖くないではないが、昔のやうな迷信がなくなつた。

昔は海の彼方の果てしを誰も知らなんだ。宇治川の先陣と異つて、その果てしのない海の向ふの向ふへ、真先かけて行かうといふ人が無かつた。

アフリカの沿岸を南へ〜と行つたら、だん〜暑くなつて船も人も蕩けるだらうと、希臘の賢人ソクラテスがおつしやつた。四百年位前まで、人々は賢人の語を信奉してゐた。

深い海には底がないと思つてゐた。どんな深い處にも、必ず底があると知つたのは、遂

ひ五十年ばかり前のことだ。

かうして海の神祕がだん／＼開かれて来た。人間が海を征服して来たのである。だが、一體何處の無鐵砲が、果てしない海の向ふへ行つて見たのだらうと思議にも思はれるが、そこには亦人間の怒が手傳つてゐる。たとへば、東洋へ行けば金銀の棒が其邊に轉がつてゐると、噂の生んだ噂を聞いて、西洋の人が東洋へ来て一儲けしようと思ふ。知らぬ道だから一直線には來れない。いろんな所へ突當る。亞米利加などもかうして發見された。

かとう・みろん

史海洋 沖の鷗に事問へば (目次)

一 獨木舟で大海原を……………一

——古代日本の海の冒険——

大海原の支配者——日本最初の海軍——二千餘年前の造船獎勵——日本最初の外征——北海征服のさきがけ——波切不動を祈りつゝ

二 漁船か海賊船か……………八

——西洋古代の海洋史譚——

海の歴史の第一頁——地中海の最古の覇者——不思議な海の動物——小流船て大航海——世界最初の軍艦——希臘戰艦——青銅造りの浴場まで備へた大艦——剽悍なる丁抹の海賊船——コロムブス以前に亞米利加發見——海の英國の芽ばえ——海のアラビヤ人——世界の海の征服史

三 東方へ向けられた全歐の心……………一九

——新國土の發見時代——

歐洲まで響いた蒙古の英雄——東方に國あり寶あり——東方への通路——葡萄牙の印度方面探検——地球々説とコロムブス——コロムブスの數次の大航海——ロコムブスは終生亞米利加を知らぬ——陸續と新大陸へ向つた探検隊——黄金の山が歐洲へ流れる——ポルトガルの東洋經綸——發見次第占領——怒一方の海の冒險——マゼランの世界一週——新領土の土人虐待——西班牙の殖民失敗

四 東洋の富を浚ふ……………三

——和蘭の東洋發展——

海の和蘭の擡頭——海軍力を背景にして——三百年前に百萬圓の配當——和蘭の漁業——世界の富を集めた和蘭——海の和蘭の下り坂

五 伊達政宗の雄圖……………元

——支倉常長の世界一週——

霸氣滿々の政宗——琉球王生擒に刺戟され——邪宗僧の命乞ひ——日本空前の大艦建造——日本船の太平洋横斷——西班牙王の常長優遇——羅馬法王に送つた政宗の書面——常長一行の歐洲漫遊——常長の歸朝

六 水戸光圀の北海探検……………五一

——隠れたる海の日本史——

大濤に面して——進水の日の新船難破——淋し過ぎる日本の海事史——第一回の大船建造——七千兩かけた快風丸——快風丸の北海行——歸路の困難——興味ある航海復命書——二百四十年前の宿志

七 海底の犠牲……………六

——潜水術の發達史話——

海底の恐怖——潜水のレコード——海底に沈められた寶——金貨三百萬圓拾ふ——浮き上る事を忘れた潜水艇——水中へ空氣を送る工夫——危険な潜水器——海底で巨怪と格闘——人の生命を奪ふ大魚——潜水夫の最大恐怖

八 海の深さと其底……………七

百尋以上の深海底——常暗の國の生物——永久浮び出られぬ魚類——深海に釣するは日本のみ——底なし海の底——海底測量の進歩——山て海が埋るか

— 海底の深林 — 海底研究の發端

風呂敷をかぶつたあした蚊帳を出し

涼み差うそが歸ると自慢が來

史話 沖の鷗に事問へば (目次) 終

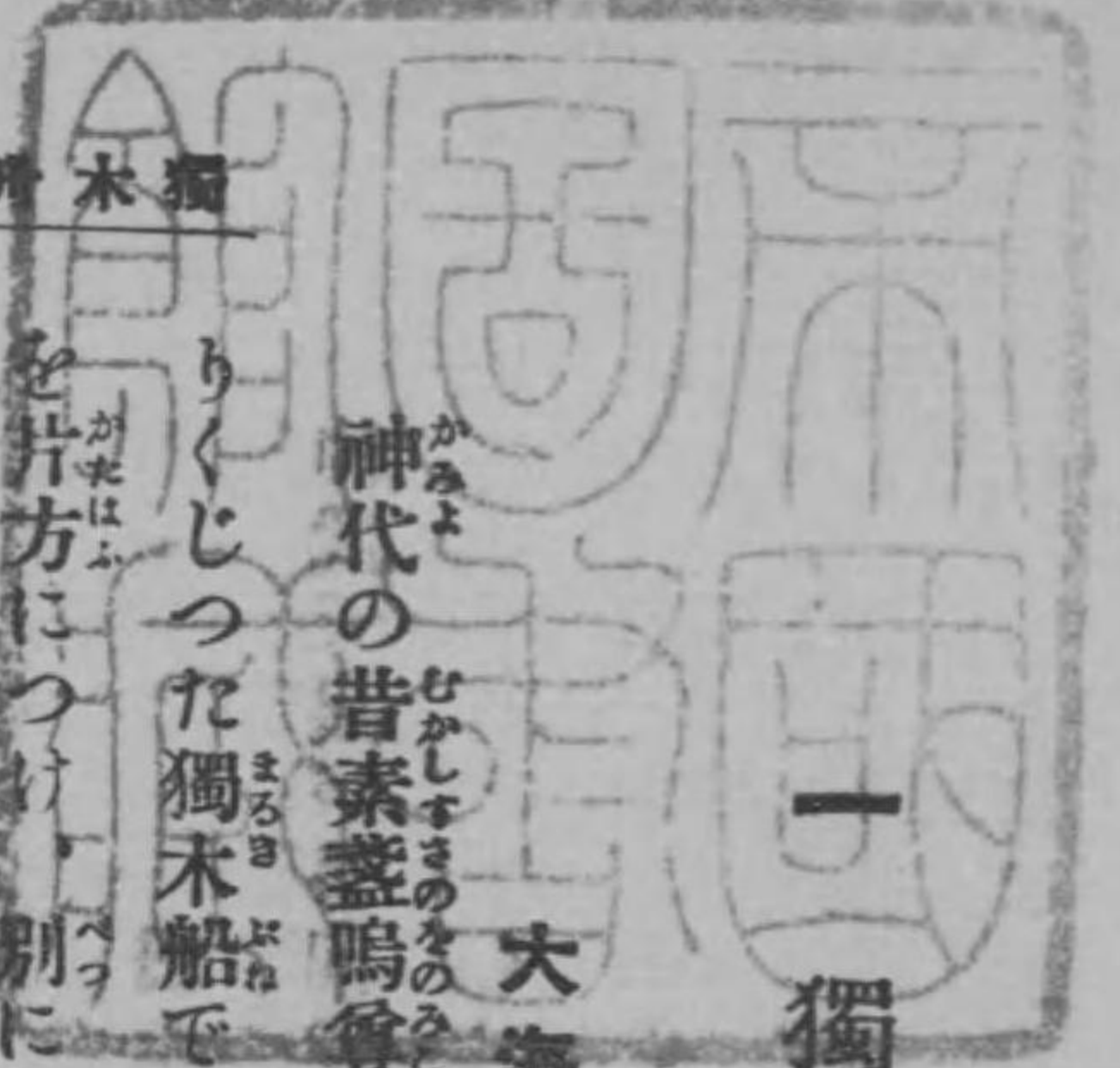
史話 沖の鷗に事問へば

加藤 美 命 著

一 獨木舟で大海原を

— 古代日本の海の冒險 —

大海原の支配者



て舟木獨

神代の昔素盞鳴尊は大海原を支配した。と云つても、その用ひた船は大木を彫りくじつた獨木船であつたらしい。埃及では今から五千年も前に、二十六挺の權を片方につけ、別に四挺の梶取用の權をつけた船があつたといふが、日本の神代は今から何千年前だかは知らんけれども、大膽不敵な素盞鳴尊は獨木の扁舟を大濤の間に繰つて朝鮮まで往來したらしい。後年出雲へ歸られて、  
『韓國には金銀が非常に多い、あれと交通するには舟が無くてはならん。』

といふので、杉、檜、楠などといふ、舟の材料に用ゐる木の繁殖を奨励された。その兄さんの月讀尊とまうし天照皇大神の直ぐの弟さんは、琉球を統御して居られたものらしい。その間の交通にも無論、我日本は四面海であるから舟でなければならなかつた。

### 日本最初の海軍

神武天皇が日向の高千穂の宮から大和へ東征の途に上られたのも、無論陸路に依つたものでなく、先づ佐賀から筑前、豊前、安藝と舟を進め、難波を過ぎて河内へ上陸されたが、長髓彦と戦つて負けた。で、再び船に歸り、熊野へ廻つて上陸し、敵の背後を突いて大勝を博した。先づ之が日本での最初の海軍であらう。その船も前に云つたやうに極めて簡單なもので、大木を刳つて鰐や龜甲のやうな形にし、それに帆と櫓を付けて渺茫萬里の大洋を縦横したものらしい。天の浮橋と云ひ、浮寶といふも此船の異名だ。また八尋の鰐、一尋の鰐などといふ

のも船の事で、大小いろいろあつたものらしい。今南洋の土人などの用ひてゐる木舟と大した違ひのないものだ。今日その遺物が多少残つてゐる。

とにかく、そんな不完全な幼稚な船で以て、随分遠くまで百難を冒して航海をしたものらしく、海國日本の精神が潑刺として充滿してゐる観がある。

### 二千餘年前の造船奨励

海の事を考へると、いつも残念千萬に思ふのは、徳川の時代になつて、大きな船を造つてはならんといふ、まるで航海停止の方針を採つたことである。之を忠君愛國的に論ずるならば、皇祖皇宗の御意に反くものと斷じて、徳川家光地下に文句があるまい。崇神天皇の御代といふから、キリスト誕生に先だつ八九十年のその昔だ、造船奨励の御思召で「船は天下の要用である、海邊の民は船が無いので歩運に苦しんでゐる、諸國に命じて船舶を造らしめねばならぬ。」といふ意味の詔勅が下つた。



そこで、海岸の住民が競つて船を造り、造船術も非常に進歩し、日本国内だけの交通にそれを用ひてゐるのでは敷なくなり、朝鮮方面との貿易までやるやうになつた。

### 日本最初の外征

船が發達するに従つて、いつもひどい目に遭つたのは朝鮮だ。内地でも諸地方に蜂起する豪族共の征伐は、皆船の力でやつたものである。九州に熊襲が反亂した時、仲哀天皇御自ら先づ紀伊國に船を發し、瀬戸内海の航路を採つて征軍を進められた。同時に神功皇后は越前國から船を日本海に進め、長門で天皇と相會し、軍議を凝らせられたとある。これが紀元二世紀の事で、その次に神功皇后が壹岐對馬を経て軍容堂々三韓を壓した。新羅王が驚き恐れて忽ち降服し、貢物を日本國に献納したとある。その貢物を満載した船が八十隻とあるから大したものだ。百濟、高麗も相次いで我が日本に御辭儀をした。海上權を韓半島に扶植した

### 第一の壯舉である。

これからといふものは、日本と朝鮮の間の船の往來が餘程頻繁だつたらしい。神功皇后の御子應神天皇が亦造船術を奨勵し、新羅から船大工を招聘して大船を造られた。長さ一百尺の船なぞが出来たものだといふ。だが此當時の船は、商船と軍艦とを兼ねたやうなもので、一朝事があると、商船の舟子も徴集されて水兵になつたものである。

日本武尊の蝦夷征伐なども矢張りさうした海軍の力に依つたものだ。船には相模から乗られたらしく、それから房州に渡り鹿島灘を経て陸前に御上陸された。こんな風で、當時既に餘程大きい船を自由に操縦し、朝鮮などが反逆を企てると直ちに殺到していぢめたものらしい。神功征韓以來天智天皇の朝に到る約五百年の間、外征の大業が十五回も記録に残つてゐる。朝鮮ばかりでない、支那方面へも通商貿易の翼を伸したものだ。

### 北海征服のさきがけ

も少し日本の海の歴史を語る。

西の方はかういふ風にだん／＼海上権が擴張されて行つたが、北へ向つては未だ凡で手が届かなかつた。日本武尊が東夷を征服したといつても、錦の御旗の翻つたのは金華山沖ぐらゐの所で、それから北はまるで土賊の跳梁跋扈に委せられた、大和民族の足が入らなかつた。といふのは一朝鮮の方が忙しかつたといふこともあり、一は道路が全く無いと云つてもよい位で、船も其處までは及ばなかつたからだ。

この北海の征服を試みた第一の勇者に、越前の國主阿部比羅夫といふ豪傑がある。千二百六十五年の昔、怒濤天を嘯む北海の荒海にも恐れぬ堅艦百八十隻を造り、その一大艦隊を率ゐて、先づ能代から秋田へと土賊を征服しながら進んで、津輕海峡附近を攻め立て、更に北海道へまで渡つた。その翌年も同様に第二回の

遠征に成功し、そのまた翌年には二百隻の舟師を率ゐて、三たび北海道へ討入り石狩沿岸からかけて北海全土を平らげた。大和民族の船が北海道方面に雄飛した第一回の壯舉である。

すつと降つて、水戸光圀が北海の海上権を握らんとして巨船建造に苦心したがその話はまた後にして、どうも北よりも西へ南へと日本人が冀足を伸すに忙しく、とかく北海方面は打つちやられて居た観がある。

### 波切不動を祈りつゝ

支那と日本と表向きに交渉をしたのが推古帝の時、紀元六百年代だ。恰度佛敎が入つて来る、それにつれて向ふの文化がどん／＼輸入されると云つた工合で航海術も此頃に目醒ましい進歩を遂げた。が、何にしても造船術は未だ至つて幼稚なもので、時化を食つたりすると胞くも閉口したらしい。當時弘法大師や傳敎大師など、日本の留學生が相次いで支那へ行つたが、傳敎の如きは途中で暴風

に遭つて三艘一緒に出た船の一番先についた船より三日も後れた、而もとんでもない方面へやつと辿り着いた。はうくくの態で支那の土に匍上つた傳教、半月ばかりは立上ることも出来んほどに弱つてゐたといふ。弘法も往きには餘程困つたさうであるが、歸りにはそれ程でなかつた。これと申すも波切不動尊の御蔭だなど、今に云つてゐるが、傳教の方はわざく太宰府に薬師像四體を造つて海路平穩を祈つたものなさうだが、薬師は不動に敵はないと見える。

今日の船でも、時々難破の惨事を見るのだから、曲りなりにでも兎に角當時既に渺茫たる大洋を押し切つて他國へ航海が出来たといふのも、神代以來造船航海を特に奨励された聖旨の御蔭に歸さねばならぬ。

## 二 漁船か海賊船か

—西洋古代の海洋史—

### 海の歴史の第一頁

世界の海の歴史の第一頁を飾るものは、アフリカの北岸ナイル河畔に棲息した埃及人だ。その船などもかなり發達してゐたが、海の事は智慧だけではいかな。寧ろ無鐵砲と云はれるほどの大膽な勇氣がなければ、怒濤逆巻く海上の覇權は握れない。埃及人の文明は既に紀元前三千年の昔に爛燦たるものがあつたが、一體に臆病で荒海などに命がけて押出る冒險好きの國民ではなかつた。だから僅かに小亞細亞から希臘の海岸に沿ひ、あの邊をうろつきながら貿易上の利益を漁つたに過ぎない。

### 地中海の最古の覇者

支那人の歴史も古い。彼等は自ら世界最古の航海者だと誇つてゐるが、信據すべき史實がない。たゞ磁針を發明したのは支那人が元祖であるが、それとても應用することに努めなかつたから、寶の持腐れの感がある。何と云つても世界太古の海上の覇權は、地中海東岸に優位を占めたフェニシヤ人のものであつた。彼等

は頑固臆昧とも云ふべき程冒險好きで、貿易といふよりは寧ろ海戦に勝れてゐた。舊約聖書に據ると、太古のフェニシア人は、當時有名な世界諸國中でも一番強い國として、地中海沿岸に嶄然としてゐた。國土は極めて狭く、人口も從つて少いが、にも拘らず彼等の勇名は四隣を壓し、南歐一帯に雄視してゐた。

小さい國で却つて勢ひのあつたのは、獨りフェニシアばかりでない。太古の希臘も然り、カアセイジも渺たる小國であつた。中世紀のゼノア、ヴェニス、フロオレンスなどを始め、和蘭、葡萄牙、英國の如きも、狭い國であつた。版圖の小、人口の高などいふものが、國力に大した關係が無いものらしい。

不思議な海の動物

殊にフェニシア人の如きは、自分の國土が、まるで瘦せた駄目な土地なものだから、自然海外に翼を伸して、海に向ふから富を浚つて來ねばならなかつた。それに、二百海里の海岸線の到る處に良港があつた。それ等の原因を成してゐるが

殊に貿易方面で世界中に類の無い寶を持つてゐた。それは一種の染料で、或る軟體動物から出来る液體だが、それで織物を染めると、艶麗正に人目を眩惑するものがあつた。他に生産品の無い彼等が、此不思議な海の動物に目を着けて、それを以て唯一の輸出品としたものだ。それを採ることがまた彼等の主な仕事で、だん／＼海岸より沖合へと遠く出るやうになり、彼等をして海に親しみ海に怖れぬ勇猛の國民たらしめた。

小漁船で大航海

彼等の用ひた最も古い船は、無論漁船で、杉や樅で造つた粗末なものであつた。その漁船に乗つて大膽に東風の勢ひ強暴な地中海を乗り廻し、航海上の智識もなし測器のやうなもの一つも持たず、平然として諸方に出没した。風の工合の好いときには、一枚の大きな横帆を用ひたが、主に權で漕いだものだ。漕ぎ手の人数も十名から十二名ぐらゐるものであつたが、そのうちにだん／＼發達して

五十人からになり、それに權を二層に排列するやうな工夫までした。

フェニシア人はカーセイジに殖民地を置いたものだが、その人々は亦更に勇敢に遠航を好んだ、彼等の道しるべは天の星であつた。彼等は自國の附近を彷徨してゐる姑息を突破して、遠く地中海以外にも船をやつた。未だ曾て何人も行き得なうた未知の水路をもどん／＼發見して行つた。まづジブラルター海峡を出て、英國の北まで行つてゐる。南西に向つては遠く亞弗利加の西岸にまで達してゐる。かういふ大航海が、當時の世界の耳目を聳動させたことは云ふまでもない。古代の詩人は常に之を著作の好題目にして、傳奇的の空想に耽つた。ホオマアの「アーゴナウト航海記」の如き、全く彼等の冒險の記録と見てよい。

世界最初の軍艦

之が紀元前九百年の頃で、我が神武天皇より二三百年前の話だ。日本に一百尺の船が初めて出來た時から見ると、すでにその千年も前に、彼等は長さ三百尺か

らの巨船を操縦して、北はバルチツクから南は亞弗利加沿岸へ更に印度まで雄飛してゐる。それが單に貿易船としてばかりでなく、軍艦としての設備も出來て居り、その型が後日希臘羅馬は云ふに及ばず、十八世紀頃までの軍艦に踏襲されてゐた。

希臘戰艦

希臘にも既に三千年前から船があつたが、尤大な海軍の起つた時代は、紀元前八百年の頃、それでも猶神武天皇より百年も早い。當時は大きい船となると、百二十人乗りの戰艦があつた。航海用の測器を始めて考へつたのも希臘人でアナキシマン드로スである。

紀元前四百年頃の地中海の覇者は希臘羅馬である。その海軍は實に盛大を極めたもので、航海よりも寧ろ海戦に没頭した觀がある。有名なペロポネソス戦争には、十六層の戰艦を用ひて衝突したものだといふ。羅馬時代になると、二千三百

噸などといふ軍艦が、櫂の數四千、乗員總數七千五百と記録に残つてゐる。といふと驚くが、當時の羅馬の船の形も、その操縦も全く希臘の船の眞似をしたもので形こそ馬鹿に大きくなつてゐるが、舊時代の希臘船と大した相違がない。

青銅造りの浴場迄備へた大艦

羅馬の船は、とにかく馬鹿に形が大きくなり、今から二千年も前に既に今日數萬噸の排水量と宏壯無比の設備とを完全にしてゐる大汽船に見るやうな、海上の一大宮殿を成してゐたものである。甲板上の結構の贅澤は云ふに及ばず、青銅造りの風呂場があり大理石の室があり、食堂には當代の美術の粹を盡して裝飾してゐる。更に圖書閱覽室があり花壇があり、今のデパートメントストアの屋上庭園式の設備まであつたといふから、さういふ點からいふと、軍艦といふよりは遊覧船といふべき趣があつた。而もその船を何百何千といふ人が掛つて櫂で漕いだといふから物凄。かういふ風に、形や體裁は恐ろしく進んだが、その割に漕法が一向進歩しないから、相變らず逆風などにさからつて進む手段などは丸で知らなかつた。波が少しヒドくなつて、櫂が役に立たなくなつて來ると、船を陸上に引上げて風の納まる間を待つといふ風であつた。

剽悍なる丁抹の海賊船

ところが、形や體裁なんぞは一向變風だが、荒海を押し切つて遠洋航海をして退けることにかけては、到底羅馬人などの及びもつかぬ海上の覇者が一方に出て來た。希臘羅馬の文化から見れば、北歐の蠻人として蔑視してゐた丁抹人などがそれだ、彼等は櫂よりも帆を多く使ひ、風力を利用する工夫を怠らなかつた。希臘羅馬のやうに、一大艦隊を編成して行くやうなことはせず、單獨に疾走して到る處の沿岸や海上の商船を荒し、巨萬の財貨を一舉に擱む海賊を働いたのである。

コロンブス以前に亞米利加發見

彼等の海賊船は北歐の全海岸を再度再三侵略し、地中海にも度々入りこんで來

て羅馬人を惱ましたものだ。北はアイルランドやグリーンランドにも行き、ニュー  
 ファウンドランドにも行つてゐる。また北米に渡つたことも、古代の記録に徴し  
 て今日では疑ふべき餘地が無いとされてゐる。その最も隆盛を極めたのは、紀元  
 後八九世紀の頃だ。古代の英國はまるで振はなかつたもので、羅馬人が、恰度神  
 功皇后が日本の第一回の三韓入りをやつたやうに、初めて英國に侵入したときの  
 如き、英國の船は戦争は愚か平日の航海にすら役に立たないと嘲つたものだ。

海の英國の芽ばえ

それに、英國は丁抹と恰度一衣帯水の間にあることだから、どれだけ彼等の爲  
 にいちめられたか分らない、自然、國防の必要から海軍力を強大にせねばならな  
 いことになつて來た。英國海軍の創立者と仰がれるアルフレッド大王が、快速力  
 を有する大船舶をうんと造つて、丁抹の向ふを張つたのは九世紀だ。十世紀の初  
 頭には六十挺からの櫂を備へた英國船が三千六百隻も出來てゐた。彼等が久しく

壓迫されてゐた丁抹艦隊を打破つて、忽ちにして海上の覇權を握り、エドガー王が  
 自ら各船に乗り海上を悠々巡幸した當時の英國の得意さが思ひやられる。だが、  
 當時の船の形は、丁抹の海賊船と同じもので、大きな一枚の横帆を廣げて、それ  
 を航行の主力とし、櫂の使用などもだん／＼少くなつて來てゐる。戦争をするた  
 めの法式は希臘羅馬に習つたが、こつちの船を向ふの横腹にぶつつけて沈没させ  
 るのが唯一の戦法である。だから船の方はヒドくとんがらがしてゐたものであ  
 る。

海のアラビヤ人

話は一寸前に戻るが、丁抹や英吉利が海上の覇を争ふ四百年も前に、羅馬國は  
 既に滅亡し、航海術の誕生地である地中海も、一向振はなくなつてゐた。一方こ  
 の間に東洋方面にまで驥足を展した、海上の勇者にアラビヤ人がある。彼等は錫  
 蘭、ジャワ、スマトラと盛に往來して、九世紀の頃には支那までのして來てゐ

る。北極を指示する磁針を初めて歐羅巴に傳へたのも彼等である。羅針盤などは當時全く無かつたもので、羅針盤の發明されたのは十四世紀の初めである。

### 世界の海の征服史

十四世紀になると、商船と戦船との區別が劃然となつて來た。戦船には大砲が据付けられるやうになり、操舵用の櫂なども全廢された。形も亦だん／＼大きくなり、英佛間の百年戦争を一期として、商船の構造にまで非常な變化を來した。いよ／＼これからの航海が世界の海の征服史となる。マルコボロが東洋の富を誇大に傳へて、全歐の航海者の冒險心を喚起し、やがてコロンブスの亞米利加發見となり、マゼランの世界一周となり、だん／＼舞臺が廣くなつて來る。伊達政宗が、歐羅巴征服の大望を抱いて支倉常長を羅馬に遣はしたのも其後であり、水戸光圀が北海探検を企てたのも其後である。

### 三 東方へ向けられた全歐の心

— 新國土の發見時代 —

#### 歐洲まで蠢いた蒙古の英雄

歐羅巴人が回教徒にいちめ抜かれた後のことである。元の太祖のチンギスカンの猛勢な噂が全歐羅巴に傳はつた。氣の早い基督教徒は、天の神様が回教と對抗する爲の基督教徒の味方を賜はつたのだらうと騒いだ。何故といふに蒙古は回教國でないから基督教徒になるだらうと考へたからだ。そこで、羅馬法王が先づ使を蒙古に送つて、御交際を求めたものである。十三世紀の初めだが、二度も使ひを出してゐる。佛蘭西でも同じ意味の使ひを出したものだ。尤も、その前からも何か一儲けしようと思つて蒙古へ行つた西洋人が有るには有つたが、かうしたやうな事から東西の往來が繁くなつた。

#### 東方に國あり寶あり



例のマルコ・ポロは父や叔父と一緒に、矢張り金儲けに出かけたもので、コンスタンチノープルを経て蒙古まで来、チンギスカンに大に優遇されて九年も居た。チンギスカンからも羅馬法王へ書面を送つた。その使ひの役に立つたのがマルコ・ポロで、書面の趣は學問の師匠を蒙古へ招聘したいといふのであつた。そこで法王グレゴリー十世が、牧師を二人元へ送つた。その案内役も矢張りマルコであつたが、途中戦争があつて、二人の牧師は歸つて了つた。マルコ一人再び蒙古へ来ると、今度は前にも増して重用された。そして諸國漫遊を二十餘年間思ひの儘にしたものである。

彼の「東方見聞記」は、再び歐羅巴へ歸つてから口授して筆記させたもので、随分出鱈目も多いが、全然嘘な筈がない。當時の歐羅巴人に非常な感激を與へたものである。殊に支那がベラボウに富んでゐる國で、金銀の棒がその邊に轉がつてゐるやうなこと書いてあるものだから、慾張りの歐羅巴人に非常な好奇心を起し、

先を争つて競争をした。それが土臺になつて、十五世紀から十六世紀へ、世界の歴史が所謂發見時代となる。

#### 東方への通路

ところが、當時支那方面へ歐羅巴からの通路といふものは、先づ黒海から出發するものとシリア、小亞細亞、埃及からするものと四通りあつたものだが、それがトルコの爲にまるで道を封じられて了つた。うつかり旅するものは途中で命を失ふといふ危険がある。あてのあるやうな無いやうな單なる冒險ならば、それが爲に折角東方へ向いた人心も、立消えになつたであらうが、一方當時は既に胡椒、珈琲などといふ東洋果物が、歐羅巴人の必需品となつてゐたので、どうしても東方への連絡を計ることが急務となつてゐた。

#### 葡萄牙の印度方面探險

そこで、昔からの通路以外に、となれば、亞弗利加をぐるつと廻るより他に道

がない。南へ南へと下つて行けば、だん／＼熱が高くなり、終には人間も熔けて了ふだらうといふ説が、アリストテレス以來信せられてゐたけれども、もうそんなことを考へる時代でもなく、先づ葡萄牙の航海王ヘンリーが、資財を抛つて船を造り、南へ南へと探險に向はしめたのは、今から五百年も前のこと。そしてその結果は、何處へ行つても森林も繁茂してゐれば動物も居るし人間も住んでるといふことが證明され、アリストテレスの所謂「南下トロケル説」などは信するに足らぬといふ實證を與へたばかりでなく、何でも之はやつて見るといふ刺戟を全歐人に與へた。

ヘンリー王が死んでも、次の王がその素志を継ぎ、とう／＼荒れの岬と名づけられた亞弗利加の南端を迂廻して印度行航路を發見した。その次のマヌエル大王が亦ヘンリー王の素志を繼いで、遂に印度への航海を完成した。大王の命に依つて此壯舉を遂げたのがバスコで、ヘンリー王が最初の探險船を出してゐる。

ポルトガル王が三代かゝつて、八十餘年の歲月と莫大な費用を使つてゐる一方地球は丸いに違ひないから、西へ／＼と行けば、やはり東洋へ行けるといふ説が出て來た。

### 地球々説とコロンブス

最初に此地球々説を唱へたのがトスカネリといふ人物で、葡萄牙王にも説いたものだが、何分にも第一聖書に叛くこととなり、驚かると事斗りだ。彼はマルコの記事をいろ／＼里數や何かを勘定し、西へ／＼と行けば、恰度米國の或る所へ出ると推定したものだ。だから、アフリカを廻るよりは西航した方が近くて成功すると思つた。此説を聞いて全くその通りだと信じ、身を挺してその實行を示さんとしたのである。

コロンブスは葡萄牙の人だから、先づポルトガル王に説いたけれども用ひられない。そこで、西班牙に趨つた。西班牙でも學者が集まつて調査會を開いた結果

空想として斥けられた。こゝでも失望した彼は、佛蘭西に行かうとして立ち去つたが或る寺の前で倒れた。それを抱き起して看護した僧が、彼の熱心に同情し、王侯に説いて漸く船を出すことになつた。

### コロンブスの數次の大航海

コロンブスの第一回の探險隊は、三隻の船に百二十人乗せ、千四百九十二年に十二月分の糧食を詰めこんで、西班牙のバロス港から出帆した。その航海中にもいろいろの物語がある。水夫等の不平、それを取鎮めんとする彼の苦心、さうしたことも無論あつたに違ひないが、随分小説的な怪しいことも傳へられてゐる。

第一回の航海は、西印度のサンサルヴァドルまで行つて、一旦西班牙へ歸つた。その間九ヶ月の長き慘憺たる航海を續けてゐたのだが、金銀の棒がそこらに散らばつてゐる處へは遂々行かなかつた。

### コロンブスは一生亞米利加を知らぬ

彼は尙數回大遠洋冒険を試みた。その一回の航海に、いつも二三年を費し、幾多の島を發見した。第三回の航海に、南米の一部に達したが、彼はそれが未だ何人も知らぬ新大陸だとは思はず、亞細亞の一地方だと考へてゐた。千五百〇二年から四年へかけての第四回の航海には、亞米利加のその未だ西に大洋があると聞いて、それがベンガル灣だと思つた。この航海を終へて二年目に死んだが、その時まで彼自身には、今の亞米利加を發見したとは思はなかつたものだといふ。

### 陸續と新大陸へ向つた探險隊

亞米利加方面へ向つた探險家は、獨りコロンブスのみではない。その先鞭をつけたのはコロンブスだが、アメリカといふ名前をつけたのも、コロンブスの第三回の航海と前後して、亞米利加方面へ探險に出かけたホジエダといふ航海家の一行である。コロンブスが死んで七年ばかりして、太平洋が發見され次第で南米から

太平洋へ出てフィリッピン群島を周り、更にアフリカを廻つて西班牙に歸つた探險隊も出た。この大航海を成した主腦者は、フィリッピンの蠻人の爲に殺されたが、航海そのものは兎に角前後三年を費やして非常な成功を納めてゐる。

かういふ世界的新発見は、歐羅巴人にいろ／＼な大變動を惹起さしめた。先づ彼等の驚いたのは、亞細亞人かアフリカ人なら未だよいが、絶海の孤島に人類が居るといふのが不思議でたまらん、恐らくは人間ぢやあるまいと彼等が思つたらしい。だから新発見の島へ行く毎にヒドク虐待した。却つてそのために土人に反抗されて、あたら生命を空うした有爲の航海家もある。世界最初の世界一周者であるマゼランの死の如きそれだ。

#### 黄金の山が歐洲へ流れる

そんなことよりも、一番大きな影響は、新発見諸國の産物、殊に金銀が船の歸り來る毎に莫大に歐洲に持ち來されたものである。

コロンブスが第一回の航海に出かける頃の千四百九十二年には、全歐洲に流通してゐる總金額が約五億二千萬圓ぐらゐのものであつたが、百年を経た千六百年には、十八億に激増してゐる。通貨の膨脹と共に貨幣の價值が下落し、物價が物凄ひ勢ひで騰貴し、殆んど前の十倍から十五倍となり、不動産の如きは約六倍となつた。さうなつて來ると、組合とか、合名會社とか銀行といふやうなものも出來、經濟界が怖ろしく活氣を呈して來る。宗教改革が起つたり、舊來の封建制度が崩壊して中央集權が起つたなども、かうした經濟制度の發展にその大きな源を有つてゐる。

この當時の西班牙の勢力は實に大したものであつた。世界の最強最富の國であつた。

#### ポルトガルの東洋經綸

西班牙がアメリカ方面に活躍してゐる間に、葡萄牙ではバスコ・ダ・ガマが印度

洋を發見して、東洋方面の貿易に力を注いでゐた。葡萄牙のやり方は西班牙とは又違つてゐた。西班牙は大國であるだけに、その發達も大陸的である。葡萄牙は小國であるだけに海洋的であつた。各々の特色を殖民政策の上に發揮した。西班牙の植民地は新大陸であつた。が、新大陸には別に恐るゝ程の有力な土人も居なかつた。だから到る處に新領土を占領しても、その土人を虐待し、その寶を本國へ吸收する策に出た。葡萄牙人は東洋に來たが、東洋には昔からの文明國があつて、當時の軍艦に乗せて來た位の軍隊では、戦つても勝てさうにもない。だから、貿易を主にして、領土の占領は二次にせねばならなかつた。土地は僅かに小さな島や港を占領するに過ぎなかつた。

#### 發見次第占領

西班牙の海の勢力が、大西洋を超越えて太平洋にまで及んだのは、十六世紀の初めであつて、當時亞米利加には既にメキシコに文化があつた。千五百十八年、

西班牙の探險隊がメキシコ灣頭に行つて、初めて其處に盛んな王國のあるのを知つた時は驚いた。その住民は北方から下つて來たもので、大西洋岸を征服し太平洋にも及んでゐた。他の米國土人とは違ひ、文化も發達し象形文字を用ひ、歴史などの記録もあつた。曆もあつた。一月が二十日、一年が十八ヶ月といふ曆で、農業が立派に發達し工業も多少あつた。政治は獨裁君主制で、都のメキシコには廣大な宮殿があつた。

西班牙の將コルテスが、十一隻の船に六百七十人の兵員を率ゐて、此メキシコ征服に行つたのは、發見したその翌年である。なんでも此當時のやり方は、先に見つけた者が得で、端からその新發見國を征服しては其處の財寶を巻きあげたものである。

#### 愨一方の海の冒險

今日探險航海と云へば、何か學問上の發見といふやうなことが目的になつてゐ

るが、此こゝ當たう時じは云いはゞ慾よく一いつ方ぱうで、見み知しらぬ海うみの果はての寶たからの島しまに入いり、一いっ擧くわ千せん萬まん金きんを粟あはづか掴つかみにしようといふのが其その目め的てきであつた。またその慾よくがあればこそ、危き險けんの多おほい蠻ばん地ちに萬ばん里りの波は濤たうを越こえて乗のり込むことも出で來きたのであらう。コルテス等らの軍ぐんは忽たちちメキシコを回めぐませ、全ぜん然ぜん西せい班ばん牙が支し配はい下かの國くにとして了しまつた。僅わずかかばかりの兵へい士しでも、彼かれ等ら土ど人じんの目めには怖おそろしき怪くわい物ぶつの如ごとく見みえた。第だい一いつ彼かれ等らは大たい砲ぱうを見みたこ  
とがなかつた。鎧よろひを着きてゐる人ひとが、どう見みても怪くわい物ぶつにしか見みえなかつた。馬うまも彼かれ  
等らには始はじめて見みる動どう物ぶつであつた。實じつ際さい亞あ米み利り加かに馬うまが渡わたつたのは此この時ときが初はじめてで  
ある。その儀ぎ容ようだけでも土ど人じんを一し蹴しゅうするに足たる。

### マゼランの世界一周

メキシコだけでない、南なん米まいの秘ひ露ろも文ぶん化くわが發は達たつして、農のう工こう商しょう共ともに盛さかんになつて  
ゐたのだ。今日こんにちの秘ひ露ろよりはもつと領りやう土ども廣ひろく、エクアドル、ポリビア、ブラジ  
ルの西さい部ぶをも含ふくむ大たい國こくであつた。矢や張はりり獨どく裁さい君くん主しゆで、宮きやう殿てんなども壯さう麗れいなものであ

つた。その富ふ裕ゆうを聞きいた西せい班ばん牙が、手てを空ひなしうしては居ゐない。忽たちち僅わずかか百ひやく八はち十じゅう人にん  
の軍ぐん勢せいが攻せめ入いつて、之これも乗のりつ取とつて了しまつた。

こんな風ふうにして、十六じゅうろく世せい紀きの半なか頃ころには、西せい印いん度どから中ちゆう米まい、南なん米まいの北ほく岸がん西せい岸がん、バ  
タゴニアに到いたる迄までの殆ほとんど全ぜん土どを西せい班ばん牙が占せん領りやうして了しまつた。かういふ成せい功こうが國こく民みんの  
冒ぼう險けん心しんを煽あほり立たて、一時いちは本ほん國こくの人口じんこうが減へり過すぎはしないかと虞おそれられる程ほど、壯さう  
年ねんの者ものは皆みな殖しよく民みん地ち熱ねつに浮うかされて新しん領りやう土どに走はしつた。

マゼランが世せ界かい一いつ週しゅうをしたのも此この時とき分ぶんである。滿まん四し年ねんかゝつてゐるが、それで  
も一いっ隻せきの船ふねに持もち歸かへつた財さい貨かだけでも、長ながい航かう海かいの全ぜん部ぶの費ひ用ようを償つぐなつて餘あまりあつた。

### 新領土の土人虐待

こんな風ふうで、世せ界かいに於おける海うみの成せい功こう者しやと云いへば西せい班ばん牙じん人じんであり、その儘まま順じゆん潮てうに  
發は展てんして來きたなら、近きん代だいの世せ界かいの歴れき史しがガラリ變かはつてゐる筈はずであるのだが、此この勢いきほひ  
も餘あまり長ながくは續つづかなかつた。歴れき史し家かはそれを殖しよく民みん政せい策さくの拙せつ劣れつに歸かへする。手て取とり早はや

く云ふと、西班牙人は到る處土人を虐待した。土人の財産を略奪する位は何とも思はず、矢鱈に彼等を虐殺した。貧弱な人口の土人が、忽ち死絶えて了ひさうにさへなつた。さうなると鑛山事業なども、鑛夫として働く手が不足になり、改めて亞弗利加の黒人などを向けて見たが、間に合ふ筈もない。メキシコ、秘露などには銀鑛があつて、無盡藏に富が掘り出されるのに、之を掘り出す人手にさへ困つた。

#### 西班牙の殖民失敗

それに、本國政府が殖民地へ送つた役人を信用しない。獨立運動でも起されやうものならと怖れてゐる。總督を初め官吏を矢鱈に交迭した。西班牙殖民地の成功は、十六世紀にその絶頂を通り越してゐる。それでも米國から得た富は莫大なもの、十六世紀だけでも四十億マークからの金銀を殖民地から得てゐる。

葡萄牙の東方經營の運命も西班牙と似てゐる。十六世紀の中葉が絶頂で、それ

から後は下り坂である。

此頃の海國日本にも、豊太閤の朝鮮征伐などといふ一場面もあるにはあるが、歐羅巴が海の外へくと伸びようとする機運の眞最中に、こちらは島國の中へ閉籠もらうとする徳川の時代になる。

### 四 東洋の富を浚ふ

—和蘭の東洋發展—

#### 海和蘭の擡頭

東海の絶島日本にまで頻繁にやつて来て、戦國時代からチク／＼刺戟を與へたのは和蘭の船である。日本との交渉の點から云つても、東洋の近代の海の歴史から云つても、和蘭をぬきにしては、フェルムの中幕を抜いたやうなものである。西班牙の海の勢力が衰へかけると同時に猛然と頭を擡げかけて來たのが和蘭である。

英國が何故當時駄目だつたかといふに、英國の海の仕事は、ずっと後から開けたもので海軍思想の如きも、一向國民の間に自覺されなかつたものだ。エリザベス女皇さへ海の事を重大視しなかつた。急にやらうと思つてもなかく、出来る筈のものでない。和蘭はと見ると、國內の地味がよくないのに持つに來て、漁業が非常に盛んであつた。それに、地理の上から云つても、恰度南北の中心に當つてゐるので、商業向きでもあつた。歐洲の富は和蘭と白耳義とを中心として集散してゐたものだ。新大陸發見後、植民地から莫大な富が西班牙に流れこんでゐたけれども、行政が下手で、いつも和蘭から金の融通を受けるといふ風であつた。こんな風で金もあり貿易上の經驗もあり、西班牙が衰へかけるや、和蘭が之に取つて代るだけの準備が自ら充實してゐた。

海軍力を背景にして

十六世紀の末頃になると、和蘭人の先驅者が盛んに東洋方面へ出かけて成功し

た。有名な地理學者のリンズホーテンが、葡船に便乗して東洋に行き、歸つて來て盛に印度の事情を書き立て、和蘭人の心を東方へ向けたのも此頃である。忽ちにして八つの會社が印度方面の事務を取扱つてるといふやうになり、一六〇一年には、和蘭船が六十五隻も印度方面へ出向いてゐた。時々海上で西班牙船と衝突したが、いつも和蘭の利に歸した。

東洋貿易では、葡萄牙と競争せねばならなかつたが、葡萄牙人のやうに土人を虐げたり宗教を強いたりする政策を採らず、反對に宗教は土人の自由に委せ、實際待遇等も白人と對等に扱ひ、大いにその歡心を買つたものだ。も一つ葡萄牙のかなはないことは、いざ戦争するとなると、到底強大なる和蘭の海軍に敵はなかつた事である。

三百年前に百萬圓の配當

やがて、和蘭政府の人を株主とし重役とする和蘭東印度會社なるものが出來、



徳川家康の死ぬ十年前には、約五十隻の大艦を此會社が東洋方面だけに用ひ、水兵、兵士、水夫の數一萬五千と註されてゐる。何しろ例のビイドロなんかを挿込んで莫大な金と換へて行くんだから、此會社の儲かつたことは荒まじいもので、創立當初の二十一年間に、利益配當金總額が、創立資本金の四十二割五分に當つてゐる。金額にして百萬圓ばかりになる。今の百萬圓なら驚くにも足らんが、今から三百年前の經濟程度での此額は大したもののである。

外國渡航禁止の高札が長崎に立てられ、荒木又右衛門の伊賀越の仇討に、太平の民が讚歎してゐる一六三四年には、和蘭商船の數が世界貿易船總數の四分の三を占めてゐた。東印度會社の商館が、東洋の到る處に建てられてゐた。

### 和蘭の漁業

かういふ海の上の和蘭の發展は、その背景を成す海軍力の賜物であつた。和蘭の海軍は、一方貿易船の陰となり陽となり、世界の海上に覇權を握つてゐた。そ

れに、和蘭の勃興の基礎を成したものに漁業がある。ペンケルソンが鹽漬法を發明して以來、和蘭の漁業は天下第一の名を恣にした。ホーランド一州だけでも漁船三千、漁夫五萬といふ、その魚類を貯藏したり仕上げたり運送したりするに用ゐる船九千隻、男女十萬人に上つたと云はれてゐる。

### 世界の富を集めた和蘭

そんな風で、競争者が出て來ると、金力、外交、武力といふ鬼に金棒で以て忽ち壓倒した。それに、和蘭人が外國の顧問となるやうな事があると、その者の本國の財産を沒收し、國外に放逐するといふ規定まで設けてゐる。海上權の獨占を圖つたものである。

十七世紀の前半までの和蘭は、かういふ形勢であつた。經濟機關なども立派に備はり、一六〇九年にはアムステルダムに大銀行が立てられた。此年には日本でも徳川二代將軍秀忠が和蘭人にだけは通商を許してゐる。和蘭は世界經濟の中心

であり、金融市場の中心であり、株式取引所であり、手形交換所でもあり銀行でもあつた。海上保険事業なども既に起つてゐた。全く十七世紀初頭の和蘭は、世界文化の中心であつた。世界各国は争つて之と同盟を結ぼうといふ形勢になつた。

### 海のと蘭の下り坂

それほど優勢を占めた和蘭が、近代になつて何故衰へたか、いろいろの理由もあるが、和蘭の繁榮に刺戟されて着々海の上の實力を充實して來てゐた英國に負けたのが、その第一原因でもあり、更に佛蘭、獨逸の隆盛に押されて殆ど致命傷を負うたというてよい。そんなことよりも、禍は内にあつた。精神的に云ふとまあいゝ氣になつて了つて氣が緩るんだ點もある。外國との交渉の如きは、凡て巧妙な外交と金力が之に伴ひさへすれば、どうにも處斷されると思ふやうになり折角百難を排して奮闘蓄積して來た海軍の武力などをだん／＼縮小して行つた。

巧妙な外交も、その背景に海軍の實力が睨んでゐればこそ押しも利くのだが、縮小された和蘭の海軍力が、列國の目に入れば、外交の押しも自然利かなくなる。一六四二年頃には、和蘭の軍艦は百五十隻からあつて列國を睥睨してゐたが、一六四八年に、その艦數をすつと減らして四十隻にして了つた、無論軍人の數も減らした。それにはいろいろ議會の鬭争などもあり、諸會社の利害關係などもあつての事であるが、詳しい事情は省く。とにかく、かうして海軍力を縮小した時に、一方には勃興しつつある英國があり、普魯亞があり、埃國があり、佛蘭西がある。絶海の一小國ならば兎に角、列強の間に挟まれた和蘭が、多少でもそこに虚があれば、乗せられるに定まつてゐる。

### 五 伊達政宗の雄圖

— 支倉常長の世界一周 —

#### 霸氣滿々の政宗

伊達政宗は餘程豪かつたらしいが、豊太閤には一目置いたものと見える。東北の天地に嘯ぶくに止まり、天下取りまでには行かなかつた。豊臣の後徳川の世となり、長い間の切つたり張つたりに疲れ果てた諸國の大名も、此邊で一やすみといふ段取りになつた。それに、家康が頭を擡げさうなものは抑へつけ、うまく世の中を鎮めて行くことに苦心したから、社會の秩序も國家の組織も、殆ど完全に或る型に嵌められて了つた。さうなつて見ると、益々霸氣満々たる政宗の、その満々の遣り場所がない。

#### 琉球王生擒に刺戟され

アムステルダムに銀行が出来たとき、幕府が和蘭に通商を許した年だ。薩の島津家久が琉球へ出かけて、琉球王を生擒りにして歸つたといふ噂が仙臺まで傳はつた。その話を聞いた政宗が、これは一つ俺もやるべきだと思つた。何でも南蠻の奴等と取引をして先づ軍用金を儲けるに如くはない。それには自分の領内に港

を一つ開いて、外國と貿易をやることだ。だが、金儲けだけでは面白くない、金が出来たところで歐羅巴へ乗込んで、南蠻を征服するに限ると、さう思ふと矢も楯も堪らない。

#### 邪宗僧の命乞ひ

たま／＼江戸の淺草に、西班牙の天主教の坊さんでソテロといふのがあり、天主堂を設けて、日蓮が念佛無間、禪天魔と他宗を罵つたやうに儒佛二教を罵り、しきりと天の神を宣傳してゐたものだ。歸依者も續々と出来、佛像を焼き家庭を棄つる有様。之は邪教の力怖ろしと、幕府が天主教嚴禁の高札を掲げ天主堂を毀ち、ソテロの首を刎ねんといふことになつた。嚴重に縛られて、最早ソテロの命風前の燈火と見えける時である。腹に大計畫を藏する伊達政宗がその命を乞うて仙臺に連れ歸つた。ソテロが其時六十だつたといふ。政宗の臣に才徳兼備の豪傑支倉常長がある。歐羅巴の事情を政宗が聞き知つたのは、此常長を遣して、老僧

ソテロに聞かしたものである。

### 日寇空前の大艦の建造

そこへ又たま／＼仙臺の領内に英吉利船が一隻漂着し、その乗組員から航海の話を聞いた政宗が、いよ／＼大艦を造つて實地に海外未知の國を探險させねばならんと決心した。一六一八年政宗は特に幕府に請願して、海外渡船の許可を受け一大艦を造るために幕府の船手奉行向井將監の智慧も借り、幕府の船大工與十郎と水主頭二人を借りた。それから仙臺藩士二人を造船奉行とし、ソテロの設計に依て遠洋航海に向くやうな造船に取かゝつた。船材に用ゐる杉の木を領内から集め、長さ百四尺、幅三十三尺、高さ八十五尺、帆柱の高さ九十九尺、副帆柱五十四尺といふ大艦を造りあげた。

### 日本船の太平洋横断

船が出来上るや、政宗は先づ敵を欺く一の手段として、自ら天主教の信者にな

つたと稱し、使節を伊太利羅馬に送ることにした。一行の總大將は支倉六右衛門常長であり、以下屈強の武士十二人、向井將監の家人十二人商人五十人、それにソテロ以下南蠻人十人、總計百八十人の乗組である。貨物は三百個、それに幕府から國王への贈物として甲冑、金屏風などを載せ、陸前牡鹿郡月浦に纜を解いたのが、今から三百五年前の九月十五日である。

船は先に呂宋に進み、遙かに日本を北に見て太平洋を東に横断し、船を亞米利加へと向けた。船がメキシコの港に着いたときは、翌年の一月二十五日であつた。政宗の船が太平洋を横断した最初の日本船である。それから一行は船を棄て、陸路メキシコの都に入つた。當時のメキシコは西班牙に占領されてから百年も経つてゐるので、殆ど歐羅巴文化の縮圖を見るの觀があつた。一行は皆參つて了つた。そして、基督教の洗禮を受けて伴天連となつたわけである。ひとり總大將の常長は、征韓の役に頑張つた腹底の勇氣を異國にも振つて、どうしても洗禮を受

けない。一行は數ヶ月此處に滞在した。それから陸路を東へ大西洋に出、今度は西班牙の船に乗り換へた。

### 西班牙王の常長優遇

彼等が大西洋の風浪を凌いで西班牙の港に首尾よく着いたのは八月十四日であつた。その秋には首府マドリットに行き、國王に謁見した。それまでひとりで頑張つてゐた常長が、郷に入つては郷に従へ、此邊で我を折る時と思つたのであらう、

『西班牙國王の御面前で天主教の洗禮を受けさせて頂きます。』  
とやつたものだ。千萬金の土産物にも優る大お世辭を、歐羅巴着到の第一線に振りまいた常長の外交が、果して大いに受けた。國王が無茶に喜んで了ひ、たまたま王女が佛國王ルイ十三世に許嫁の約が出来たのと同時に壯麗嚴肅な儀式で以て洗禮を受けさせる光榮を與へた。天主教の洗禮には、生みの父の外に義父義母と

云つて、信仰上の父母を新しく設ける規定になつてゐるが、王は常長の義父義母の爲に、西班牙國の侯爵とその夫人とを選んだ。光榮益々大なりである。恰度これが日本の元和元年正月元日に當る。

### 羅馬法王に送つた政宗の書面

常長等は西班牙に停まること半年餘、海路羅馬に向ひ、法王に謁見を求めた。

法王パウロも此遠來の客の爲に、盛大なる儀典を設けて引見した。常長恭しく法王の前に進みて、萬里の波濤を越えて齎らした政宗の信書を献じた。法王莞爾として之を受けた。

その政宗の手紙といふのは、頗る奇抜極まるものである。漢文混りの候文體でそれに處々變な假名が入つて居つて讀みづらくもあるが、三百年の昔こんな手紙をわざわざ使節に持たして遣したかと思ふと興味がある。讀者の便宜の爲に、多少讀み易く書き下して御覽に入れる。

やうに我等が使者とおほしめし(御召)遣はし下さる可く候。某し國とのゑすはんにや(イスパニヤ)之あひた近國にて御座候。向後ゑすはんにや(イスパニア)の大帝皇ととんひりつ、(ドン・フヒリブ)様と申し談すべく候ため其元相調べられ下さる可く候。伴天連衆渡船成るため願ひ奉り存候。猶ほ以て某之上貴きてうす(天主)大道の御前において、おないせうに叶ひ申すやうに願ひ奉り申候。猶ほ此國如何様の御用等仰せ付けらるべく候。随分御奉公申し上げ可く候。是式に御座候へども、日本の道具恐れ乍ら進上仕候。猶此伴天連ふらいるす。そてろと六右衛門口上にて申し上げべく候。其くち次第に成さるべく候。早々恐入候。誠惶敬白。

伊達陸奥守 花押  
政 宗 印

慶長十八年九月四日

於二世界一賞御親五代目之  
はつははうろ様

進上

常長一行の歐洲漫遊

常長羅馬に滞留すること數ヶ月、遂に議員になり貴族に列せられた。それから一行は歐洲諸國の漫遊にと出かけ、なか／＼悠々たるものであつた。彼等が陸前の月浦に再び向ふの船に乗せられて歸つて來たのは元和六年の八月だから、出發して前後八年の長日月を費してゐる。

常長の歸朝

常長等の船が波の彼方に消えてより、此八年の間沓として便りの聞きやうがない。政宗は云ふに及ばず、仙臺藩の人々が何れだけ氣を揉んだか分らない。遂に元和二年の八月再び大船を製造して、向井將監の臣横澤將監を使とし、堺の津から解纜して支倉一行の消息を探るべく、南蠻へ向けて出帆せしめた。その迎ひの船も歸つて來ず、政宗が最早失望の裡に沈んでゐるときに、常長等が歸つて來たのだから、全藩上下の喜び想像の外であつた。一體ソテロも一緒に船に乗つて來

世界に於て廣大なる貴き御親五番目の(第五世)はつははうろ(法王パウロ)の御足を日本に於ける奥州の館伊達政宗謹而吸ひ奉り(キス)申上候

我國に於けるさんふらんしすこの御もんは(門派宗派)の伴天連ふらえるいすそてろ(ルイス・ソテロ)尊きてうす(天主)の御法をひろめて御越の時我等と

へ御見舞なされ、その口よりきりしたんの様子いづれもてうすの御法の事を取分申候其に附て思案仕候ほどしゆせう(殊に勝る)なる御事まことの御定

め之みちと奉存候それに従つてきりすたんになりたく存じながら今之うちは去り難きさしあわせ申す仔細御座候而未だその儀無からず候。去り乍ら

某分國中おしなべて下々迄、きりしたんに罷成申候やうにこゝへ可申ために、さんふらんしすこの御もんは(門派)うちにあらせ(中で)れんはんしや(連

判者)の伴天連衆御渡し成され下さる可く候。いかやうにもしゆせう(殊勝)大切に存す可く候。御渡し成され候其伴天連衆に萬事に付き而御ちからを御ゆ

るし下さる可く候。其伴天連衆に我等手前より寺をたて、萬に付き御ちそう申す可く候。我國のうちにありて、たつとき(尊き)てうす(天主)の御法を御ひろ

め成され候ために、然る可しと思しめし候程の事を相定め預く可く候。別して大きなつかさ(司)も御一人定め下され預かるべく候。さやうに御座候而やがて

やがて皆々きりしたんに罷り成り候事一定と存じ奉候。我等何やうにも請取り申候。間、御合力之儀すこしも御きつかひ成さるまじう候。是に付きて

我等心中に存候程の事此のふらいするそてろ存せられ候。間、貴老様御前叶ひ奉り申すやうに頼み入り、我等使者を相定め渡し申候。其口を御聞き遣はし

下さる可く候。此ふらいするそてろにさしそへ遣はす我等家の侍一人、支倉六右衛門と申す者を同使者として渡し申候。我等めうたい(名代)として御したか

いのしるし御足をすひたてまつるために、國ろうま迄進上仕候。此伴天連そてろみちにて自然はてられ申候はば、そてろ申され置候。伴天連をおなし

るし下さる可く候。其伴天連衆に我等手前より寺をたて、萬に付き御ちそう申す可く候。我國のうちにありて、たつとき(尊き)てうす(天主)の御法を御ひろ

め成され候ために、然る可しと思しめし候程の事を相定め預く可く候。別して大きなつかさ(司)も御一人定め下され預かるべく候。さやうに御座候而やがて

やがて皆々きりしたんに罷り成り候事一定と存じ奉候。我等何やうにも請取り申候。間、御合力之儀すこしも御きつかひ成さるまじう候。是に付きて

我等心中に存候程の事此のふらいするそてろ存せられ候。間、貴老様御前叶ひ奉り申すやうに頼み入り、我等使者を相定め渡し申候。其口を御聞き遣はし

下さる可く候。此ふらいするそてろにさしそへ遣はす我等家の侍一人、支倉六右衛門と申す者を同使者として渡し申候。我等めうたい(名代)として御したか

いのしるし御足をすひたてまつるために、國ろうま迄進上仕候。此伴天連そてろみちにて自然はてられ申候はば、そてろ申され置候。伴天連をおなし

やうに我等が使者とおほしめし(御召)遣はし下さる可く候。某し國とのゑすはんにや(イスパニヤ)之あひた近國にて御座候。向後ゑすはにや(イスパニア)の大帝皇とといひりつゝ(ドン・フヒリブ)様と申し談すべく候ため其元相調べられ下さる可く候。伴天連衆渡船成るため願ひ奉り存候。猶ほ以て某之上貴きてうす(天主)大道の御前において、おないせうに叶ひ申すやうに願ひ奉り申候。猶ほ此國如何様の御用等仰せ付けらるべく候。随分御奉公申し上ぐ可く候。是式に御座候へども、日本の道具恐れ乍ら進上仕候。猶此伴天連ふらいるす。そてろと六右衛門口上にて申し上ぐべく候。其くち次第に成さるべく候。早々恐入候。誠惶敬白

慶長十八年九月四日

伊達陸奥守 花押  
政 宗 印

於世界二賞御親五代目之  
はつははうろ様

進 上

常長一行の歐洲漫遊

常長羅馬に滯留すること數ヶ月、遂に議員になり貴族に列せられた。それから一行は歐洲諸國の漫遊にと出かけ、なか／＼悠々たるものであつた。彼等が陸前の月浦に再び向ふの船に乗せられて歸つて來たのは元和六年の八月だから、出發して前後八年の長日月を費してゐる。

常長の歸朝

常長等の船が波の彼方に消えてより、此八年の間杳として便りの聞きやうがない。政宗は云ふに及ばず、仙臺藩の人々が何れだけ氣を揉んだか分らない。遂に元和二年の八月再び大船を製造して、向井將監の臣横澤將監を使とし、堺の津から解纜して支倉一行の消息を探るべく、南蠻へ向けて出帆せしめた。その迎ひの船も歸つて來ず、政宗が最早失望の裡に沈んでゐるときに、常長等が歸つて來たのだが、全藩上下の喜び想像の外であつた。一體ソテロも一緒に船に乗つて來



たのだが、呂宋まで来て日本の様子を聞いて見ると、幕府の耶蘇教禁制がますます嚴重を極め、到底入國出來さうもないと思つたので、日本までは來ずに呂宋に止まることになつたのだ。

西班牙國王の書、羅馬法王の手紙、それに精巧を盡した彼方の土産物の數々、常長等の物語る驚くべき文化と戰爭術、政宗にとつて見るもの聞くもの皆驚異の種であつた。常長等の服装からしてすつかりハイカラになつてゐた。とても歐羅巴の征服は現在の日本の武器武力では及びもつかん、是非とも向ふの文明を輸入して、一大進歩を圖らねばならんといふのが常長等の復命であつた。

政宗は再び大船の建造を目論んだが、幕府の鎖國主義は此頃になると愈々嚴重で、その志を果し得なんだ。かくて圖南の鵬翼をして空しく東北の一城に老いしめたのであつた。

## 六 水戸光圀の北海探検

— 隠れたる海の日本史 —

### 大濤に面して

光圀卿は如何しても船を出せといふ。船長の立花源兵衛は、此荒れでは逆も船が出せないとなじろぐ。昨日漸く落成した新造の巨船である。前の失敗に懲り、今度は御自分で新船に乗つて見ようといふのであるか、房州沖から押寄せ、堤のやうな大濤が壘み返して岸を打つこんな日に、それも遠い海で止むなく遭つたしけなら兎に角、今日始めて水に浮べるといふ船が出せさうもない。

餘り愚圖くしてゐるので、光圀卿が怒り出した。

「兼てから日和を見て今日と定めて置いたではないか、その今日になつて變更するなどは以ての外のことだ。」

「畏りました、然らば。」

と云つて、源兵衛が先づ船員全部乗せて了ひ、最後に自分、それから光圀卿と、續いて船へ乗らうとするその刹那、光圀一人を阜頭に殘して、素早く導板を取外して了つた。

帆をあげると見るや、船は烈風に送られて海上遙かに立去つて了つた。風はいよ／＼烈しく波はいよ／＼高く、船は木の葉の如く飄蕩される。大きな波が船を噛んで忽ち船内が水桶のやうになつて了ふ。乗員が總出で刀を抜き、帆柱などを切り倒すかと思へたが、その先は阜頭に立つ光圀の肉眼には見えなくなつて了つた。

進水の日の新船難破

船も乗手も以來杳として行方が知れない。源兵衛は光圀の御意に従つて、命を捨てて海へ出たやうなものだ。主人の意志を遂げさせるために、自ら死地に赴いた臣下のことを考へると、光圀は其儘に一刻も打捨て置けない。と云つて、船は

漸く造りあげた只一隻あるのみ、陸上で及ぶ限りの手段は盡した。各地の港には概を飛ばし、或は人を出して搜索に手を盡したが、總て無効に終つた。

これが西紀一六八五年で、伊達政宗が太平洋横断の大船を造つてから六十餘年後の事である。

淋し過ぎる日本の海軍史

一體、水戸光圀は、いろんな方面に百年に殘るべき事業をしてゐる。「大日本史」の編纂事業は云ふに及ばず、日本の長き將來の爲に常に畫策實行して止まなかつた。栗山大膳が一心を賭して支へた彼の豊前の黒田の若殿の如きも、うかうかと大きな船を造つたり焼いたりしたと傳へられるが、確かな史實は知らない。恐らく徳川三百年の間に、海上の征服を夢見た大名もあるにはあつたらうが、伊達政宗の雄圖を除いては、水戸公の北海探検の壯舉以外に、話の種は一つもない。

歐羅巴では世界の果てから果てへ新領土を漁り、新貿易國を求めてゐる眞最中に、海國日本の海の歴史は餘りに淋し過ぎる。

第一回の大船建造

儂なく難破して、その行方さへ知れなくなつた此船は、光圀の造船の第二回であつた。それより十年ほど前に、長さ百八尺巾三十尺の大船を造つた。今日から見れば憐れなものだが、それでも政宗が太平洋を横断させた船よりも、すつと構造も大きく凡てに進歩してゐた。船内に備へつける船具とか艤装物の如きも、わざわざ長崎まで買出しにやつて集めたものである、その時の器具雜品の名前や代價などを書いた領收書の寫しが今日でも残つてゐる。

例へばコンバス二本銀七匁、大磁石釘（磁針）一つ、銀二十匁、ジャガタラ迄カ  
ルタ（瓜哇）に到る海圖）一枚銀四十三匁、右の屏風板（海圖を挟む板）一枚銀五匁  
右の板塗賃銀三匁、日本カルタ（日本海圖）一枚銀三十匁などといふ具合で、合計

三百五十五匁五分御品數九つ云々とある。

此船に玉井源六といふ者を雇入れて船長とし、試航海として東海諸國の沿岸を廻らして見たが、此源六の奴が途方もない放埒者で、うんと費ひ込みを出し、とう／＼鳥羽の港から逃亡して了つた。他の船員がそれに代つて、兎に角無事に歸るには歸つたが、最初の事でもあり、構造が極めて不完全で船の動搖が甚しく、到底遠洋航海なぞの出来さうな船ではなかつた。それで取毀して了つたものだ。

七千兩かけた快風丸

第一回に此失敗あり、第二回には又儂ない結末を遂げてゐる。もう船の事は諦めるより外はなくなつた。水戸一門の人達も再び造船の事は、如何な光圀卿も敢てしまいと思つてゐると、光圀は一向初一念を翻さない。直ちに第三回の大船建造に着手し、一兩年にして前よりもつと大きい船を造りあげた。快風丸が之である。

快風丸は長さ百六十二尺、巾五十四尺、櫓四十挺、帆柱の長百八尺、帆の大きさは木綿五百反を用ひ、葵の紋章をつけた紫天幕や、丸の中に水の字を染め出した下幕を張り廻し、屋形の周囲には更に葵の紋をつけた大提灯十二、小提灯十六個をかざり、黒鳥毛の九尺鎗二本を立て、鐵砲十挺小鎗二十筋を具へ、中には傳馬船二隻を載せ、その大きい方は五十四尺とある。按針箱、羅針盤、海圖など、當時得らるゝ限りの完全な器具物品も備へつけ、前の二回の船に比べると、その堅牢な點に於ても同日の談でない。製造費も金七千餘兩といふのだから素晴らしきものである。

快風丸と命名したのも光圀自らだ。當時支那から歸化した名僧、心越禪師に命じ、快風丸の三大字を揮毫させて之を船上に掲げた。その額、大きき五尺餘り、總體黒塗で、字を金に浮出させたものだといふ。

快風丸の北海行

光圀の目的は、北海道方面の探検にある。快風丸に三年分の糧食を積込んで、矢張り房州の那珂港から出帆したのが元祿元年で、今から二百三十五年前だ。乗員の數六十七名、船長は岬山市内と云つて、天文や航海の諸法に熟達した名手であつた。船役人としては碇役二名、舵取三名、小役二名、大工一名で、北海道へ行つてから、案内者を一名雇入れた。

船は首尾よく三陸の港々を経て、航行四ヶ月にして石狩川に達した。土人等が目を丸くして見物に集つた。快風丸の人達は土人に酒を飲ましてやつた、蝦夷が喜んで酔拂つて踊りををどつた、船員等も面白かつたのであらう、其處に四十餘日も滞在した。丁度夏の間北海道の地勢や人情風俗の視察を遂げた。

歸路の困難

八月歸途に就いたが、途中しげに遭つて北の方に流さるゝこと四晝夜、快風丸も亦空しく海の藻屑と消えるかと思つたが、幸ひにも長い間の難航海に船を毀し

もせず、一人の人命も失はずに那珂港に歸つて來た。それが十二月の末であつた。

興味ある航海復命書

この一行が水戸公に奉つた航海復命書といふのが今日残つてゐる。海の冒険家が命を賭して贏ち得た記録としても、亦當時の北海方面の風物を偲ぶ料としても自分は讀んで見て非常に面白いと思つたから、少し長いが、その儘讀者の一覽に供する。

今般快風丸石狩へ渡航し、歸途東風に乗じて出帆したるに、神威岬より北風に變じ順走を續ける後、九月六日暮より俄かに南風起り、其の勢猛烈を極め、刺へ大雨止むときなく、十日の夕刻まで鞆鞆の方へ百里程も漂流したるも、船體堅牢なるを以て別段の故障を生せず、十一日に又順風に復しければ十五日を以て松前の近傍なる江刺と云ふ處に入港せり。松前より石狩まで航程百五十里と

聞及びたるに、意外に少時日にて到着したるより考ふれば、百里内外ならんと思惟ぞり。此海上險惡なる波浪ありて、松前の船舶の如きは容易に航過する能はず。舟人等は大に之を恐れ、殊の外難儀なる海路と稱す。是舟も小にして殊に沖合を避け、陸岸に近く航して激潮を犯すが爲めに外ならざるなり。本船は往復共に洋上に出で航行したれば、何等の苦痛を感せず、安穩に之を通過したりぬ。蝦夷の方言は去年記載し置きたると毫も異なる處なし。蝦夷人の風習等も東北ともに同様にして至て素朴なり。本船の來泊するや土人歡喜して之を迎へ毎日鮭魚などを持參して船員に寄贈しければ、我も亦濁酒等を彼等に給せるに、一同滿悦して酒の肴に、つく打といへる遊戯を催して我等に示しぬ。そは各自手拭などを用ひて巻きたる棒を手にて、之を以て一人の膚ぬぎに伏したる蝦夷人を一打も二打も力に任せて亂打す。打れたる窮鬼起き上り、又之を打返して、鬼の掌の觸れたるもの代て更に打たれ役となる。或は慘酷に叩かれ、

悶死することすらありといふ。是は隣郷の土人に對し、意趣打ちする爲め、平素より之を練習する戯にして、兒童の如きに身に毛皮を著用して、互に打合をなすを例とす。

石狩川の廣さは那珂川(水戸城の側を流る)よりは大に、水も亦深く、其の兩岸四五里の間平地相連り、處々森林鬱茂して、陸行する能はざれば、土人等皆河上を往來して交通し居れり。河岸の附近に村落斷續し、一村に會長一人づゝあり。會長は常に四五人の妻妾を有し、他に奴僕を使用せず。而して妻妾は一人毎に一家を營み、多人數混住することなし。故に一見したる處にては、會長の如く覺えざる程なり。然れども石狩川の頭領たる會長カルヘカと云へるは、此の地方の勢力家にして、他の土人之に行き逢ひたるときは、各其前に來て頭を垂れ、カルヘカ手を出し彼の頭を押し、暫時の後手を放す習慣なりと云ふ。彼等の食物は平鮭を細かく切り、湯煮をなして鮫の油を注ぎ喫食し、又生鮭は頭

骨の軟かき部分を嗜食せり。鮭魚の蕃殖は甚だ盛にして漁期に際すれば、舟の艫に烈しく衝き當るもの少なからず。豫て聞及べるよりも多し。生鮭百本を米一斗二斗に交換し得べき松前の制令定めらる。

才大介といふ干鮭は、蝦夷にても珍物にし、祝儀用になすと云ふ。今般之を持參して歸航せり。其尾に附着せるものも、亦祝儀の符標に土人の殊に必要とする處なり。丹頂鶴は一羽一分程の代價にて購求す。是は土人の妻女が卵より懷中にて撫育したれば、能く人に馴れ親しみ抱きても恐怖することなし。

間切といふ小刀二本蝦夷人の細工になる。中身は日本物にして京都邊より輸入するとぞ。此の細工も特種の器具を用ゐずして、此の間切にて手工を加へたるに過ぎず、其の他製作品を見ず。

土人等本船を一覽して、此の如き大船は蝦夷地に始めて來航したる事なりとて大に喫驚し、三四十里を隔つる遠地より舟に乗じて、多數の土人來船して觀覽を

なし、彼等に食物など與ふれば、欣喜すること甚しく、或は熊皮等を携來りて之を酒と交換し、四五日間も逗留するものありき。今回平潟に於て仙臺に歸航の船共九月中廿六隻も破損す。風雨の爲め錨搦み合ひ、容易に解脱する能はずして、困難せる際、本船入港したれば、其の依頼に應じて轆轤にて卷上げ、一兩日中に錨五十挺許取拾ひ、彼等に渡しけるに、各船の人々一方ならず喜び合へぬ。本船の装置良好なる爲め、世間の利益にも關すること少からずと思惟せり。平潟にては本船の出帆を二三日延期せられたしと迄願ひて逗留を望みたり。松前城下より上に辨慶が崎といへる所へは陸路六日を要す。同所には辨慶甲石と稱する石あり。松前城下より下に宇須といへる所へは陸路五日を要す。同所には義經公の甲石あり。松前城下より下に沙流といへる所へは陸路九日を要す。同所は義經公の一時滞在せられたる形跡あり、公同地會長の女婿となり、沙流の近傍ハへといへる所

に城塞を構へられ、爾後其會長の家屋を奪取して、陸地へ歸去られたりと土人の口碑に存す。彼等は義經公をウキクルミ殿、辨慶をシヤマニユークルと呼べり。前記の件々は多年來土人の傳説する所なれば、其の眞偽は容易に判すべからず。深谷荻右衛門は蝦夷へ著船以後、松前より雇傭ひ入れたる通辯高山次郎兵衛を伴ひ、米味噌及び苦等を人夫に荷はせ、石狩より三日路ほど奥蝦夷に向つて河流に従ひて往きたるも、夜に入れば小屋を掛け、苦にて屋根を葺き休息す。此の時日本の船人漂泊して此の地に著船し歸ることを得ず、土人の婦を娶り兒女を養育して住居するもの十四人あるを發見せり。本船の始めて石狩に著するや各地方に本船觀覽の爲め來るべしと、通事をして土人等に傳へしめられたれば、此の船人共も之を知りつらんに、遂に本船に來らず、仍て我等酒を持參したれば

明日我が宿舎に來りて酒杯を取るべしと、更に一同に傳へしめしに、毎日二三百人以上づつ、三日間來集せる男女凡九百五十人を算す。各欣々として酒杯を手にし、婦女の如きも小兒を懷抱しながら、汗腕にて一二杯引きかけつゝ、飲むもありき。多數土人の内に往昔の鬼ビシの親族十三人、各所の庄屋の如く割據するものあり。此の中カルベカイン、リウンマイン、カウトクインの三人は何れも装束を著けて來れり。其の服装は緞子の類にて製する羽織の如く、又直垂にも似たり。されど袴の類は用ゐず。カルベカインは長命にして本年百二十三歳にもならんとぞ。蓋し蝦夷人は自ら年齢を覺えざるを以て、その容貌等より通辯次郎兵衛の推察して語れる所なり。カルベカインの子二十三人あり。奴婢は三十二三人あり。家屋を二つ三つに分けて作り置くといふ。荻衛門蝦夷人の壽命二百歳といへる男を六七人見たるに、日本人の八九十歳程に見ゆるのみ。其の腰は弓の如く頭髮雪の如く、髯は坐せずして地に達し、猶四五寸を餘せり。

女子も百二十歳のもは間之れありとぞ。

蝦夷の物産に黒く咲く花あり。其の名詳らかならず。日本の姫百合の如し。六月より八月初まで花咲く。島鴟梟といへる鳥は高さ四尺ばかりにて日本の鳥と異ならず。アモウイといへる島に臘臍多く産す。アモウイは夷蝦石狩川より五六日行程にあり。本船にて積來れる物品及び動物は熊皮、干鮭、生鮭、臘虎の皮、海馬の皮、丹頂鶴三羽等其他雜品ありたり。

二百四十年前の宿志

北地探検の此大計畫も、幕府の大船建造禁止の嚴令の下に、無殘にも取毀して了はねばならぬ運命にあつた。光圀は北海道から更に樺太、カムチャツカ、韃靼方面へと冀足を伸ばす雄圖であつたが、元祿十三年に光圀も此世を去り、七千兩を投じた近代日本唯一の巨船快風丸も、元祿十六年にはバラ／＼に取毀して二束三文に商人の間に分配された。すつと下つて、水戸烈公が大艦製造の議と蝦夷開



拓説とを幕府に建議したのも、祖公の宿志を繼承したものと見られる。その間實に百三十年を過してゐる。

## 七 海底の犠牲

—潜水術發達史話—

### 海底の恐怖

大地を掘つて金銀を求むる企てにも、山を開いて隧道を通す仕事にも、そこには幾多の犠牲が拂はれる。地を探り天を翹る文明の冒険は、吾等同胞の生命を幾百何千と奪ひ取つてゐる。紺碧の海のその底をきはめるためにも、今日の落こち易い飛行機が、何々大尉、何々中尉の名譽の死を遂げさせるやうに、勇敢な海の子を悲惨な死に數限りなく陥れた。

海の底には人間を呑む鱧が居る。五體を縛る一丈餘の章魚が居る。怪しげな形をした動物が餌を求めてうろついてゐる。すでにそれだけでも深海の底は、吾々をゾツとさせる。更に恐ろしいものがある。猛烈な水圧力だ。一寸平方に百斤餘の大重量を以て壓迫する海底の水の力は、生の身體をベチャンコにする。

### 潜水のレコード

何にも器具を用ひないで、二分間なら潜つてゐられる。今から四十年ばかり前に、四分三十秒といふ潜水レコードを作つた者がある。更に六分間素裸で潜つてゐた者もあると傳へられてゐる。之等は假令事實としても、例外に過ぎない。近代の發達した潜水服を着てなれば、丈夫な人ならば可成り深い海底で數時間働くことも出来るが、百尺以上深くなると、水の壓迫がヒドくなつて來、百五十尺となると、その水圧力が一寸平方に約九十斤からになる。餘程強い體格でなければ我慢が出来ない。

### 海底に沈められた寶

昔から海の底に沈んで、現にそこに在ると知りながら、どうともすることの出

來の財寶が到る處にあつた。西班牙のアルマダ艦隊の一沈没船の如き莫大な黄金を積んだ儘海の底に在ると分つてゐるが、海底の作業が發達しない當時には何うすることも出来なかつた。その船の黄金を拾ひ上げようと企てたのが、英國に潜水業組合が設けられた最初の動機で、今から三百三十五年前である。昔ミュル島の近海に沈没してゐる此船の殘骸を調査する第一の冒険が大袈裟に爲された。ジエームス・コルキーホンといふ博學沈勇な一英人がその先頭第一の人で、自ら海底に降つて調査を試みた。此人は皮製の空氣管を用ひて海底旅行をやつて見たりした。海の底については特別の經驗と勇氣とを持つた人で、その調査もかなりの成功は治めたが、それもその特別の人にだけ出来る藝當で、コルキーホンなき後は再びその事業も中止になつた。

金貨三百萬圓拾ふ

それから七十六年ばかり経つて、妙計奇策に長じたメルジム公といふ人が、此難破船から數門の大砲を釣上げた。それは潜水鐘といふものを用ひてやつたもので、極めて幼稚な作業ではあるが、畢竟此二人が今日尙潜水業の元祖として追慕される。

それから三十年ばかり後で、海の底から金貨三百萬圓を拾つた人がある。矢張り英人でフリッツプといふ勇敢な男だ。ヒスバニオラの海中に沈没してゐる西班牙の軍艦から探しあげたもので、彼はたいそれだけの功に依て華族にされた。

浮き上る事を忘れた潜水艇

かういふやうなことが、海の底に對する興味を唆り、何かしら旨い工夫がないかと、いろいろの人がいろいろの智慧を絞つたものだ。その間には、今から考へるとかなり珍奇な話もある。英吉利の造船所の一職工が、漫々たる大洋の深底に自由に活動し得る一潜水艦を製造し、數時間海の底にゐて浮上らうと思へば何時でも自分から浮上れるやうな仕掛を發明した。そこで、自分はいゝ氣になり、資

本金の募集をしたところが、その金も恐ろしく澤山立所に集つた。彼は自分の思ふ通りの潜水艇を造り、いよくブリマウス海峡内の一灣頭でその實驗をするこゝたになつた。投資者は勿論、群がる見物を前にして、大膽なる發明者自身その船に入り、扉を閉ざすや、百三十尺からの海底に沈みこんで行つた。非常に大膽な意志の強い男ではあつたが、學理上の研究はまだく届いてゐなかつた。見物がいくら待つてゐても、彼の船が上つて來ない。豫定の時間が何倍と經過しても上つて來ない。彼は海底の水壓力の爲に無残にも壓死したのである。操縦者を失つた船が上つて來る筈はない。つまり、百三十尺からの深さになると、どれだけの水壓力があるかといふことを究めず、多少その水壓に對抗するやうな空氣室のやうな仕掛はあつたけれども、殆ど役に立たなかつたものである。一體その船の仕掛といふのは、先づ重量二十噸の砂利を船底に積み、その重みで海底に沈み、いよくこれから上らうといふときに、その砂利を捨てる仕掛をしたものである。

水中へ空氣を送る工夫

空氣を罐の中に貯へて、それを持つて水の中に潜るといふ工夫は昔からある。それがだんく發達して、空氣の通ふ管に重りをつけたものを考へ、水面から水底へ空氣を流通さして水中の人の呼吸を助けるといふ風になつた。前に云つた潜水鐘などはその仕掛である。それが殆ど今日の潜水器と大差のない程度まで發達し、百四十年も前から潜水鐘に空氣管と空氣ポンプを備へるやうな工夫が施された。

危険な潜水器

けれども、舊式の潜水鐘では随分危険がある。海の中で空氣管や救命索などが縫れ合つたりすると、空氣が十分に送られて來ないから窒息の憂目に遭ふ。今から五十年ほど前には、随分さういふことがあつた。英國のドーバー港の築港の時の如き、烈しい潮流の爲に潜水鐘が轉覆し、その中の潜水夫が窒息したことがあ

る。一體、舊式の潜水鐘は三十三尺からの深さに降りると、海の水が中へ入つて来る。それ以上の深さになると、更に水が入つて来て、鐘内の空気が凝縮して丁ふ。

海底で巨怪と格闘

こんな話がある。或る潜水夫が、約四十尺の深さの海底に降りて作業してゐると、だん／＼するうちに、足の下に何やら氣味の悪いものが動いてゐる。ビツクリして殆ど氣絶するばかりになつたが、腹を据ゑてよく見ると、巨大な鱈が一尾、自分と同じ鐘の中に入つてゐる。つまり、靜かに降りて行くときに、恰度鐘の底になる處に鱈が居て、その儘鐘内の捕虜となつたものである。鱈の奴も驚いて恰度硝子罐の中に入れられた金魚のやうに、周囲の鐵板に鼻先をぶつつけては暴れ狂つてゐる。鱈も度を失つてゐるが、更に度を失つたのは潜水夫である。何しろ一つの檻の中に虎と羊が入られたやうなものだ。海中の巨怪の前には、人間も

脆い。一呑みに呑みこまれて了ふ運命の下に、彼は震へ上つた。もう一瞬間もぐ／＼してゐられない。やるところまでやつて見るより仕方がない。鋭利な刃物を堅く握つて、ふいに巨怪の滑らかな腹を、柄も通れと突刺した。怒れる鱈が狭い鐘底を遮二無二暴れ狂ふ。こつちもまるで目も見えなくなり、意識もポーとして来たが、たゞ矢鱈に何十箇所となく突刺した。幸ひに鱈の牙が彼の身體にまでは及ばなかつた。この激烈な争闘が、さう長い間續くものでない。だん／＼鱈の勢ひが衰へて来たが、鐘の中は血で一ぱいになつた。彼は一方潜水鐘を引上げて貰ふやうに海面の人に合圖を與へると共に、最後の一撃を此巨怪に加へた。すると鱈がまた猛烈に暴れ出し、全く手に終へぬ状態になつた。

時ならぬ合圖に、海面の人々も驚き、急いで引上げて見ると、徐々として水上に現はれて来る鐵色晃々たる潜水鐘の姿に變りはないが、いよ／＼上まで上げると、鮮血に塗れた巨大な怪物が、彼等の脚下に躍り落ちた。しかも未だ死んでゐ

ない。全身を震へ動かして悶え苦しんで、そのそばに誰も寄りつく人がない。潜水夫はと見ると、鱧の血を浴びて人事不省に陥つてゐる。僥倖にも片手に微傷を受けただけで他に怪我はしてなかつた。やがて蘇生した。

人の生命を奪ふ大魚

かういふやうな話は數限りなくある。海蛇のやうな無氣味な動物と戦はねばならぬやうなこともあるかと思ふと、小さい魚が眞黒になつてやつて来て、その爲に手も足も出ないやうなこともある。鰻が氣管の周りにしがみついて、息の根を断たうとするやうないたづらをすることもある。章魚なども、小説にあるほどではないが、六尺以上のものに巻きつかれると、どんな剛の者でも十分位で絶命して了ふ。

潜水夫の最大恐怖

だが、何と云つても、潜水夫の最も恐れるのが鱧である。奴は自分から進んで敵を攻撃しようとはしないが、腹が減つてくれば何でもお構ひなしに飛び掛つて呑んで了ふ。殊に朝非常に腹が空いてるものと見え、朝奴に見つからうものなら、忽ち躍りかゝられる。遠洋での船員の朝の水泳ぎは、鱧の爲に朝飯を御馳走してやるやうなもんだとさへ云はれてゐる。それに奴はなかくづるいから、潜水夫がちやんと身構へをしてゐるときなどは躍りかゝつて来ない、上つたり下りたるするその虚に乗じて、猛然とかゝつて来る。いつか南洋で、牛や羊をうんと積んだ船が沈没したことがある。一人の潜水夫がそれへ降りて行くと、鱧の大群が溺死してゐる牛羊を奪ひ合つて、凄惨身の毛も彌立つやうな争鬭をしてゐる。一匹の牛に數十尾の鱧が集つて争ふ、牛の死屍がこたかくになつて海中に散亂する。潜水夫はその鱧の大群の間に挟まつて僥倖にも九死に一生を得たが、古來鱧の爲に命を奪はれた潜水業者の數ばかりでもどれだけあるか分らない。

## 八 海の深さと其底

### 百尋以上の深海底

「海の底はどんなものかね。」  
と漁師に聞けば、

「陸のやうなもんでさあ。」

と無雑作に答へる、

「その通りですか。」

と學者に聞けば、

「大體さう思へばよいが、然しそれは百尋以内の深さの處で、曠原もあれば小山もあり、従つて谷もあり、眞つ平なものではない。それに、矢張り陸のやうに草木なども生え茂つてゐたり、海草が密生してゐたり、沼のやうな處もあれば、

泥深いやうな處もあり、實に千變萬化である。」

と答へる。一體、海の底といふやうなことを云ふ場合には、さういふ百尋以内の處よりは、もつと深い海底を指すのが、學問上で云ふ所謂海底である。百尋内外までは普通の陸と變りがなく、山坂などもなく、急な傾斜になつてゐるが、それが百尋以上となると、傾斜がすつと緩やかになり、第一太陽の光線が通らなくなるから、海藻にせよ草木にせよ、その色合からして變つて来る。水の流れも緩く極めて静かで、流れもせず動きもせず、どこもかしこも一樣な常暗の冥府の觀がある。

### 常暗の國の生物

そこに棲む生物も自ら變な、光線が届かないから、届いたところがまるで微弱なものだから、目なんかも大變違ふ。眞暗の中でも何もかも見えるぞと云つた風に、圖抜いで目が大きくなつてゐるものもあり、いくら大きくしたところが所詮暗闇の世

體からいふと眞赤なものと眞黒なものと二色だ。

永久浮び出られぬ魚類

色ばかりでない、形も氣のきかない風をして、のそ／＼緩やかに動いてゐる。鯉とか鱒とかいふやうな、水雷形をしたやうなものは殆どない。深い所に棲むものほど形が不恰好で、赤魚やムツなどを見てもそれが分る。

何を食つて生きてるか、植物はなく、動物は食へない。止むなくお互同志食ひ合つてゐる、戦争が度々あれば世界の人口が減るやうに、始終食ひ合ひをしてゐるから、数が極めて少ない。それに、海が深くなるほど水の壓力が強くなるわけだから、身體も頑丈に出来てゐる。何故そんな處にうろ／＼してゐて、上の方へ遊ばに來ないものかといふと、さうは行かぬ理由がある。うつかり出て來ると、水の壓力が緩むので、奴さん達の身體の造りでは調子が合はなくなる。眼が破裂して見たり胃の腑が膨れ出したりするやうなことがよくある。壓力ばかりでなく、

界だ、奮發するだけ駄目なことだと諦めて、全く目の無くなつてゐるものもある。かと思ふと、佛様が後光で浮世を照す如く、自分の身體から光を發して、その邊を明るくして、さて改めて見ると云つた仕掛になつてゐるものもある。その色は大抵黄色味が、つてなかく、明るく、人間の拵へた舊式な燈火などを負けらすが、一體その光がどんなものから出來てるかは、今のところ未だ分らない。

人の棲む世界にも假りに、光がちつとも無かつたならば、女はお化粧を止めるだらう。友染も縞もあつたものでない。一樣に眞黒になるだらう。生物進化の原則で、生物の色など、いふものも、幾千萬年幾億萬年の間に必要に應じて變つて來てゐる。毛虫は青い色をして青い葉の間に隠れ、小鳥は木の葉色をして、巧みに秋の野に獵する人の目を惑はす、深海の底は暗闇だ。だからそこに棲んでゐる生物の色などが、どうあらうと一向目立たない。従つて頭から尻尾と、同じ様な單純な色をしてゐる。その色にもいろ／＼變つてゐるものもあるにはあるが、大

表面には瓦斯があるから、その影響を受ける。

### 深海に釣するは日本のみ

深い海になると、網も針も利かない。先づ二三百尋程度の處で釣をするのは日本位のものだといふ。他ではそんな深い處へ釣を垂れることをしない。播摩赤穂などでよくやつてゐるが、普通の針だと潮流に揺られて駄目だから非常に重い重りをつける。入れるときは難かしいが、上げるときは水の壓力がだん／＼減つて来るから楽だ。

### 底なし海の底

海の深さは昔から神秘とされてゐた。六十年ぐらゐの前までは、海の深さは測り得ない深淵とされてゐた。そしてその測り知り難い底には、恐ろしい怪物が互に争闘してゐると想像してゐたものだ。今日では海洋學が進んで、どんな深い所でも亦どんな場所でも、測量の出来ないといふことが無くなつた。今まで測つたと

ころでは、三萬三千尺以上の所がなく、それだけの長さのものでどうしても底まで届かなかつたといふこともない。

十九世紀の中頃である。歐洲と亞米利加との間に海底電線を敷設しようといふ大膽な計畫が企てられ、その爲には先づ大西洋を横切つて電線を沈める通路の水の深さを確實に調べねばならぬ必要が起つた。それが動機となつて、海の深さを測ることが學界の流行ものとなつた。十九世紀以前に深淵の測量を試みた者が無かつたわけではないが、道具や方法がなつてないから、届くべき處にも届かないで了ひ、底なしなどといふ荒唐無稽な傳説が信じられてゐたのだ。

### 海の測量の進歩

海の深さを測るといつても、單に深さだけを測るやうなことはしてゐない。先づ一番底の土を標本として採りあげ、それから其處の水とそれから中間の水との標本を採ることや、その標本を取つた場所の水の温度も測らねばならん。そこで、



測定器も非常に複雑なそして緻密なものとなつたが、今日では殆ど海圖の上に海底の地理をも明かに記すことが出来るやうになつた。

### 山て海が埋るか

さうして測つた結果、世界中で一番深い所は、太平洋のヒリツピンの近くで、約三萬尺からある。地球上の最高峯ヒマラヤ山中の最高峯エレベストが約二萬六千尺だから、深さと高さとを合して五萬六千尺である。然し地球の半径の三百二十八分の一に過ぎない。

全世界の海の平均水深も約一萬尺だといふ計算が今日ではついてゐる。それが分ると、海の水の總量も計算される。計算した數字もあるが、途方もない大きな數字だから、此處に擧げた處が想像もつかんから略す。とにかく世界の水は陸の十三倍に當つてゐる。昔の人は陸を以て海を埋めることが出来るものと考へてたが、それは出来得べくもない。

### 海底の森林

海藻も處に依つて數百尺の長さ、恰度材木のやうに生え伸びて、一大森林を成してゐる處がある。此海底の森林は海の移民である魚の隠れ場所でもあり亦彼等の食料の供給所でもある。大荒れの日などは此森に避難する。その大荒れが數日續いたりすると、無數の魚類が一緒に集つて籠城するので、さしもの大森林も裸山にされて了ふことがある。

大西洋の北西にハルクランドとかツリスタンとかいふ小島があるが、その附近は有名な深林海で、素晴らしく大きな海藻があり、三百尺以上のものが密生してゐるといふ。深林のある所は、申し合せたやうに潮流も波もない。水が油のやうに靜かに湛えてゐる。かういふ海藻は、山の頂には生えない、八合目から下、主に凹んでる處に茂る。さういふ深林の附近へは、汽船がどうしても近づけない、草に絡まつたら推進機が動かなくなる。

### 海底研究の發端

話は飛んだが、海底の研究に、初めて近代の科學を應用して指を染めたは、僅僅五十年ばかり前からの事で、海の事にかけては何時にも魁をする英の軍艦チャーレンジャー號がその任に當つた。此船が世界中の數百箇處に根據地を設け、五年間の星霜を費し、到る處の水の深さを測ると同時に、深淵に棲息繁茂する動植物の標本を集め、一方海底の土質とか、水深と海水溫度との比較とか、實に空前の方法を以て空前の一大事業を成し遂げた。此船に乗込んで遠征に従事した人の中に二人の有名な海洋學者があつた。サー・ジョン・ミルレイとドクトル・フイーアール・ミルスである。

英國がやると獨逸も負けてゐない、米國もやる。殊に米船が米國附近の深海を測量した方法が實に精密を極めたものである、その用器も完全で、今日尙殆ど改良の餘地なしとまで云はれてゐる。それが例の海底電線の敷設の爲に絶対必要の

事になつて来て、海の測量が今日のやうに素晴らしい勢ひで發達したものだ。



大正十二年七月十五日印刷  
大正十二年七月二十日發行

海 洋 史 話

(定價金六拾錢)

著 者

加 藤 美 侖

發 行 者

大 柴 四 郎

印 刷 者

川 上 隆

印 刷 所

凹版工業株式會社

東京市神田區三河町一ノ一六

東京市神田區三河町一ノ一六

東京市神田區通新石町九番地

發 行 所

東 京 市 神 田 區 新 石 町 九 番 地 朝 香 屋 書 店  
電 話 替 東 京 二 二 三 三 番 番  
三 二 二 三 番 番

(1)

版八十三

分らぬ物  
とあきら  
めた相對  
性が復活  
しました

アイ  
ン  
ス  
タ  
イ  
ン

# 相對性も是なら分る

定價四十錢  
送料金四錢

どの本を見ても失望した人の爲に、分らぬと聞き怖して敬遠してゐる人の爲に驚む。世界を震憾したアインスタインの原を、小學程度に致養の人にも分るやう書き碎いた著者の技倆の冴えを見よ、第一頁から笑ひながら讀める國民讀本として發兌勿々大評判です。

観概の容内

▲一尺蓋が九寸になつたか▲學者の力辯の入れ所(科學の芽生からニユートン迄)▲光學の争ひ▲アインスタインの役目▲時計も物差も當にならぬ▲こゝが相對性原理の要所▲今までの學説がぐらついた▲相對性を一言で云へば(外數十項)

(2)

版十二

つまらぬ  
事で恥か  
くなくだ  
らぬ事だ  
汗かくな

社交  
知識

# 吾身の上の恥と損

定價四十錢  
送料金四錢

時には齷齪も一興だが、ザツクパランで通る仲にも腹の底には用意がある、希くば本書を讀まれよ、本書一巻は文化の物差云はず語らずの不文律、現代相當の設備作法社交の骨の眞を穿つ他人を笑ふ前に先づ自己を省察されよ、紳士教養のメーターは之

観概の容内

▲お客様の御入來(客の迎接と社交機微)▲人を訪れてボロを見せるにも氣がひけて(今の人にも必要な和洋食卓の禮法)▲座敷はあがるが智慧がない(客問の裝飾心得)▲盲に鏡を贈るが如し(挨拶見舞贈答)

(3)

版六十

(奇抜な附録)  
當世閻  
魔番附  
眼然  
犯罪處罰一目

刑法  
知識

# 罪なき人も油斷すな

定價四十錢  
送料金四錢

遠くて近いは男女の仲、善と惡とは紙一重といふ、過失が過失で通らぬが今日の法、又此方が眞直ても先方から曲つて來れば正當防衛の策も要る。法は悪人の爲めに存せず、善人の爲に存す知るは一時、知られば一生の損無精をせず御一讀、一生安心の資とされよ。

観概の容内

▲有難くもあり迷惑でもある(刑法の御利益)▲吾等の生命と生活の爲に(全人格の保護の法律)▲金が敵の世の中(財産に關する罪)▲お互に社會の一員として(公安を害する罪)▲國を亂す罪▲お巡さんの一寸來い(外數十項)

(4)

版六十

攻むるも  
守るも法  
の世の中  
日に中提  
灯必要

民法  
知識

# 權利と義務の鉢合せ

定價四十錢  
送料金四錢

心得た者はメケムと法を潜り、知らぬが佛の寝耳に水を澆ぐ、法律など面倒臭いと無精をしてると風一匹の事にもハラ／＼し、人に聞かれても返事が出來ぬ。希くば本書を讀め。内容の懇切はいふだけ野暮屑の疑らぬ文章にあらゆる紛争の種難題の掛引を一讀釋然たらしむ。

観概の容内

▲貸た借たが事の始り▲素人の驚くおどかし▲裁判沙汰と物云ふ書類▲訴へられての應戦▲最後の手段もお上の厄介▲差押から競賣まで▲抵當と質入の話▲新しい借地信家法▲法律の保護に安心せよ▲借地信家の争議調停

(5)

諷刺  
評傳

# 粹な親鸞様

定價金四十錢  
送料金四錢

版六十

民衆の宗  
教戀愛の  
洗禮親鸞  
の魂が物  
をいふ

親鸞はナゼ流行る。禪は茫漠とし、日蓮は骨が折れる。親鸞教は現代的だ。戀もせよ、金も儲ける、嘘も止むを得まいといふ。弱者の爲の哲學、俗物の爲の宗教だ。諷刺と洒落と妙文に其眞骨頭を穿ち波瀾萬丈の生涯。  
讀者の心頭會心の微笑を禁ぜらしむ。

内容の概観

- 〔一〕天笠坊サン顔色なし
- 〔二〕高野聖に宿貸する
- 〔三〕南瓜のお尻
- 〔四〕惱める秀才
- 〔五〕牛金色
- 〔六〕草の鞋に竹の杖
- 〔七〕戀の關所

(6)

納税  
知識

# 知らずに納めてる税金

定價金四十錢  
送料金四錢

版十二

中告も不  
平も根柢  
ある知識  
の上には  
れよ

強制でない筈の税金が、嚴重煩瑣な法規によつて取立てられる。其裏を潜らうと算段をする者あり、分も分らず唯ブーいふ者あり、税金といへば國家と國民と喧嘩腰なるは淺聞し。大身上になると専門の博士を顧問として反問苦肉す、不平をいふ前に本書に依て這般の機微に通曉されよ。

内容の概観

- ▲國稅徵收の實際▲地租の話▲所得稅の話▲營業稅の話▲相續稅の話▲通行稅の話▲鐵業稅の話▲狩獵免許の話▲間接稅犯罪者處分の法▲酒造稅▲醬油と砂糖と石油と織物▲賣藥稅とかるた稅▲印紙稅便覽▲登録稅便覽

(7)

主婦  
大學

# 細君アラだらけ

定價金四十錢  
送料金四錢

版四十

諷刺諧謔  
の中にも  
女の生活の  
骨頂を穿  
つ珍書

著者曰く「人の細君をコキおろして此の一卷をなす。寐覺のよき業でもないが、細君方からは恨まれても、天下の良人諸君子からは「よき代辯よ」と煽てられること必定」と著者一流の諷刺皮肉は天下の細君を滅茶滅茶となしたり。而も根もなき漫罵にあらず、悉く夫婦生活の眞に徹せるもの、女は読んでくやしがり玉へ。男は読んで「ソレ見ろ」と痛快がり給へ。

(8)

經濟  
知識

# 貧富ローマンス

定價金四十錢  
送料金四錢

版四十

活躍的  
經濟史  
話！人皆  
富むの理  
想實現へ

貧乏は戀をも乾枯びさせる。いやなものだがナゼ貧乏人がある。金持は腹も減らぬに飯を食つて。貧富の對抗は經濟史のつて以來、人類争鬪の活畫面だ。現代を觀よ。プロとブルどががみくやつてる。これを古今に尋ね世界に究めて、貧富顛倒の經濟史觀を流麗に物話つたのが此本である。貧人も讀め、金持も讀め、そこには開かれざる寶庫の鍵がある。



改造思想  
ルソオから現代まで

四六判美本  
定價六拾錢  
送料四錢

〔編二第書叢間人〕

著 倫 美 藤 加

世界を焼く社會改造の焰の渦の全幅を眺めよ！

社會主義も民本主義も、所謂過激思想も、止むに止まれぬ人間必死の要求を背景とする社會改造の矢張りである。その源を探れば遠く佛の革命兒ルソオに至るべく、十九世紀から現代へ、蓋世の偉才は悉く其勇ましき闘士であつた。

滔々たる其精神は近代の中心思想として世界に心熱を燃やしつつある。其全般を懇説した本書は、近代文明に通せんとする人の必讀の好讀本でなければならぬ。

内 容 大 要

天才兒ルソオと革命思想  
▲革命と改造思想  
▲デモクラシーの出現  
▲ブルジョアとプロレタリアの出現  
▲社會改造運動の先驅  
▲マルクスの學說と思想  
▲社會主義文化と世界  
▲社會主義思想と近代文藝及哲學  
▲ルソオとボルシエヴィズム  
▲クロトキンと無政府主義  
▲抗の革命兒ガンヂ

〔編三第書叢間人〕

著 倫 美 藤 加

概 哲  
論 學  
常 識 と し て の 哲 學

四六判美本  
定價六拾錢  
送料四錢

嚙み碎かれた哲學大系！現代人の心の榮養！！

芝居的一幕見をするやうな軽い氣分で、いと高き哲學の殿堂を覗きみられよ。古往今來數千年、人類の聖苦に依て築き上げられたる精神文明の絢爛に眩惑さるべし。哲學は學者の玩具でもなければ唐人の寢言でもない。現代人の常識として消化され、心の生活を豊潤にする活學問である。希くば無精を一擲して本書を讀め。何人も滿悦せん。斷言して憚らぬ。

内 容 大 要

智慧の芽生、其成長  
▲仲の好い親類同志  
▲宗教と藝術と倫理學と哲學  
▲他人のそら似か  
▲哲學の内容は何だ  
▲知識論について  
▲形而上學で云ふ唯物論と唯心論  
▲宇宙の過去現在未來  
▲哲學上の人生觀  
▲哲學の背景  
▲なすもの  
▲心理學と論理學と哲學

【行發版四十第】

〔編四第書叢間人〕

# 加藤美倫著

## 近代哲學 カントから現代まで

四六判美本  
定價六拾錢  
送料四錢

大哲學者の大思想を一巻の活書として展開す！

思想を談ずる者は一たびカントに還り、其流れに掉して、睨いては散る兩岸の想華を眺めつゝ現代の大哲ベルグソン迄來ねばならぬ。連綿たる哲學思想の脈絡變遷を、一巻のフィルムとして讀者の眼前に投げ出したのが本書である。解説の首尾透徹せる點に於て、ズブの門外漢にも釋然通曉せしむる點に於て晦澁難解に肩を凝らせぬ點に於て嶄然として類書に冠絶する

### 内 容 大 要

夢幻的な理想哲學 ▲ 厭世悲觀の哲學 ▲ 科學に化けた哲學 ▲ 兩極端の痛烈な哲學 ▲ 個人主義の哲學 ▲ オイケンの精神哲學 ▲ ウェーバーの實用哲學 ▲ 新東方主義の思潮

## 近代藝術 ゲエテから現代まで

四六判美本  
定價六拾錢  
送料四錢

塔に上りて世界を觀よ！然る後に日本を語れ！！

此百年ばかりの世界の文壇を見よ。火事場のやうな猛勢さだ。吾等は其燎原の火の全景を眺めむとして終にゲエテまで還つた。それが此一巻である。由來、文藝は文化の反映、時代の先驅である。文藝を控除した世界は燒残りの骸骨である。血湧き肉躍る近代文明の核心に觸れむとする人は讀め。日本脚下の思潮は其影繪である。本書は之を白日の光に全照した。

### 内 容 大 要

ゲエテから出發して ▲ 理想詩人がカントの自然主義 ▲ ヴォーグの詩人 ▲ シラの中心として ▲ カタンの詩人 ▲ フリスケンの中心として ▲ 大なりしたトリスケンの中心として ▲ シヤ文壇 ▲ 十九世紀後半の英米文壇 ▲ 現代文壇への轉回 ▲ 神秘象徴主義 ▲ 南歐文學の代表 ▲ オランダの英雄主義 ▲ ロマン・ロウランの英雄主義 ▲

【行發版八十第】

〔編五第書叢間人〕

# 加藤美倫著

塔に上りて世界を觀よ！然る後に日本を語れ！！

### 内 容 大 要

ゲエテから出發して ▲ 理想詩人がカントの自然主義 ▲ ヴォーグの詩人 ▲ シラの中心として ▲ カタンの詩人 ▲ フリスケンの中心として ▲ 大なりしたトリスケンの中心として ▲ シヤ文壇 ▲ 十九世紀後半の英米文壇 ▲ 現代文壇への轉回 ▲ 神秘象徴主義 ▲ 南歐文學の代表 ▲ オランダの英雄主義 ▲ ロマン・ロウランの英雄主義 ▲



【行 發 版 四 十 第】

〔編 六 第 書 叢 間 人〕

### 著 倫 美 藤 加

比較  
宗教

## 世界の宗教を觀る

四六版美本  
定價六拾錢  
送料 四錢

史實と教義より觀たる東西の代表的諸宗教！

世界的な大宗教だけでも六つある。その中にまた宗派が無數にあつて、お互に輕蔑し、敵視してゐる。儒教、道教、印度教、佛教、基督教、回教、それらの教義と歴史と獨立せる信仰を持つてゐる。それが、どう違ふかを比較紹介したのが此本である。一面に於て巧に描かれたる世界宗教史であり、開祖列傳であり、公平なる内容批評である。

#### 内 容 大 要

人間の住む所宗教あり▲儒教と道教▲孔子學と老子學▲印度教▲吠陀學と波羅門教▲釋迦の佛教▲開祖物語と佛教の眼目▲猶太教と基督▲マホメット教▲不思議な回教の力

【行 發 版 四 十 第】

〔編 七 第 書 叢 間 人〕

### 著 倫 美 藤 加

日本  
文化

## 五 等 の 佛 教 常 識

四六判美本  
定價六拾錢  
送料 四錢

千四百年の日本の文化を裏書する佛教發達史

木佛金佛石ほとけ、佛臭いこと世界無比の日本に住んでゐながら、一向その知識を持たぬは心細い。千四百年の昔日本へ來た佛教が、本家に衰へて日本に榮てゐる次第はどうか。傳教、弘法、法然、親鸞、日蓮、偉僧高僧を排出し、政治的にも、民衆的にも日本のあらゆる文化の基調は佛教にある。其複雑多面な全體を縦横に物語つた本書は正に江湖の感謝に値すべし。

#### 内 容 大 要

佛様の御入來▲日本の神様と天竺の佛様▲王法と佛法との矛盾▲傳教と弘法▲佛さん達の素性▲法然の新宗教▲親鸞と一蓮▲日本の禪宗▲日蓮と法華經▲骨の抜けた佛様

ピツソン原作 矢口達譯

(十版發行)

# 神秘の女

性に生きんとして子の愛の絆

に悩む人生の大悲劇!!

戀の爲に夫を棄て愛兒を置いて走り乍ら忘れ得ぬ子の愛に心を苛まれ苦惱の生を終る悲劇の女の一生を見よ。姦通―流轉―淪落―苦悶―殺人―と而も不思議な運命に支配されて我愛兒の辯護を受く。二十何年間の波瀾の境涯と心理を解剖描寫せる深刻の大傑作。

四六判美裝幀  
定價 壹圓八拾錢  
書留送料十八錢

發行所 東京 市 神田區 通新石町 朝香屋書店

## 出版界の驚異 肉筆口繪入り珍書

肉筆口繪のみにて拾圓以上の價值あり

## 東海道漫畫紀行

東京漫畫會 會員共著

東京漫畫會十八人は由緒深き旅の詩の搖籠の實狀を世に紹介したい希望に依り去年東海道自動車旅行をした。この冊子は其時收獲せし興味津津たる逸物を最適當な版畫と文章に依り同人各獨特の妙筆を揮つて表出したものである。見よ！大正の新時代に生れたる漫文漫畫の五十三次と吾等が子供の時より廣重の版畫に依つて唄はれ十返舎一九の膝栗毛によつて説かれて子守唄と共に心に浸み込んだ五十三次とのコンストラストの如何に面白きかを！

肉筆執筆畫伯  
岡本一平 細木原青起 在田 綱  
近藤浩一路 服部亮英 池部 鈞  
清水對岳坊 中西立頃 矢野左行  
水島爾保布 前川千帆 小川治平  
池田永治 代田收一 幸田純一  
山田みのる 森島直三 下川 四天

特製 四六版、表紙木版摺、美術製本函入  
肉筆口繪 八寸横六寸、極上畫紙、額  
面用一枚、彩色密畫四色版、凸版、ワタキ五  
十五圖各畫伯の紀行文約二百五十頁  
定價金五圓 送料金十八錢  
並製 定價金二圓五十錢 送料金十二錢  
(肉筆は特製全部に挿入す)  
(並製には肉筆口繪を付せず)

發行所 東京 市 神田區 通新石町 朝香屋書店

糸左近先生著

# 青年科學

全壹冊

四六判洋裝美本  
頁數三百廿餘頁  
定價金壹圓五拾錢  
郵稅金拾貳式錢

(再版)

著者曰「心理學上或は道德學上の見地よりして「青年研究」とか「青年修養談」とかの書は多しと雖も醫學上より——科學的に且つ物質的に特に青年のみの衛生及精神修養法を説けるは恐らく本書がその嚆矢ならん」と、然く其の思想上、生理上の一大危険期たる青年時代に處して身心安定のバイロットを爲すもの即ち本書あるのみならん。著者獨特の輕妙平易なる筆に依りて説かれたるもの概略左に摘抄す。

- ▲青年期の標準▲青年期は人生の危
- ▲又其時期▲青年の皮膚病▲青年の
- ▲筋骨強壯策▲飲食物と性慾▲青年の
- ▲胃腸病▲青年の心臓▲青年の呼吸器
- ▲胸腺強壯策▲青年の肺結核▲青年
- の神經系 ▲腦の使用法 ▲神經衰弱
- 症▲青年の眼▲近視眼の原因及矯正
- 法▲忍耐力を強くする法▲精神統一
- 法▲肥える法と瘦せる法▲身長を伸
- す法

發行所

東京市神田區通新石町九  
電話神田二三三、編番東京二四三

朝香屋書店

醫學士 大塚脛三先生著

△△△大增訂五版▽▽▽

# 女性醫學

四六判全一冊  
裝幀總布美本  
定價金壹圓八拾錢  
送料金八錢

本書は女子の月經來潮より閉止に到る間の數奇な運命を面白く説いたもので、殊に性の問題は女子の生涯を通じて最も重大なる事件であるから素人に了解し易からしむる爲平易に赤裸々に解説を試みた。(著者)

## 目概容内

- ▲妊娠はどんな動物で女性となるか
- ▲破瓜期に於ける男女を豫知する法
- ▲月經とは何か○どうして月經があるか
- ▲子宮出血といふものに就て○月經過多並に
- ▲子宮内に於ける女性の生涯
- ▲成熟期に於ける愛の現象
- ▲無月經○子宮内膜異常○月經困難○全
- ▲身性諸病に於ける女性の生涯
- ▲妊娠の生理と妊娠中の衛生並に警戒
- ▲胎毒の母體の生理状態
- ▲生殖器分泌液の意義

▲婦人醫學書の範として好評嘖々▼

- ▲婦人科手術の效果について
- ▲妊娠中の衛生
- ▲飲食物の衣服○住居○便通○運動○睡
- ▲眠○乳房の手當○授乳○妊娠中の性交
- ▲分娩の生理と分娩時の心後
- ▲産室と産床○産衣○分娩中の食事○用
- ▲意すべき器具
- ▲産褥の生理と衛生
- ▲居室○臥床○精神の安靜○食物○外
- ▲産部の處置○乳房の處置
- ▲避妊の時期的變化
- ▲性慾の生理的變化
- ▲性交による生殖器の損傷
- ▲不妊症○妊娠と子宮癌 (外數十項)

電話神田二三三、編番東京二四三

朝香屋書店

東京市神田區通新石町九

# 脚氣療養

全 壹 冊

著 生 先 近 左 糸

四 正 郵  
六 價 稅  
判 金 拾  
美 壹 錢  
本 圓 貳

内容を總論、原因、症候、診斷法、豫後、攝生法、治療法、豫防法とに大別し議論の多は原因は三十段に分けて詳述し症候は本病を五種に細別して何人にも解り易く通俗に講述し攝生法、治療法は古今の説を悉く網羅し新舊薬は一切掲げて之を忌弾なく批判してある。本病者は勿論本病の素因ある人士の必ず一讀せられ徒らに小豆や麥飯、糠等の食物に抱泥せず、速かに其の誤解を覺り一刻も早く健全な心身に復されたきものなり。

發行所

東京市神田區通新石町九  
電話神田三三三番發東京二四三

朝香屋書店

393  
130

12.8.28

終

